聖　書

原文校訂による口語訳

トビト書
ユディト書
エステル書

フランシスコ会
聖書研究所訳注

中央出版社

2035033885

PETRUS

TITULI S. ANTONII S. R. E. PRESBYTER CARDINALIS TATSUO DOI
DEI ET APOSTOLICAE SEDIS GRATIA ARCHIEPISCOPUS TOKIENSIS

推薦のことば

近年、わが国における聖書研究、ならびに聖書の翻訳は、日をおうて盛んになりつつあります。

この時に当って、全国教区長会議の要望に応じて、一九五六年にフランシスコ会聖書研究所が、原文からの批判的口語訳を企図し、詳細な注を付して「創世記」「レビ記」「知恵の書」をすでに公刊し、さらに今般、「トビト書」「ユディト書」「エステル書」の三書を一巻にまとめて発刊しようとしていることは、まことに意義深いことであります。

この機会に、一般読者がますます聖書に対して関心を増し、その教えを探求して神の恵みと摂理とを悟られるように、強く希望するものであります。

最後に、同研究所所員の努力と、本書の発行に対して多大の協力を示された恩人がたにしんじんな感謝の意を表し、あわせて祝福を送ります。

一九六〇年六月十三日　聖アントニオの祝日

東京大司教
†枢機卿 ペトロ 土井辰雄

はしがき

ここにフランシスコ会聖書研究所は、「トビト」、「ユディト」、「エステル」の三書を一巻にまとめて世にお送りする運びとなりました。

三書ともイスラエルの歴史物語に属するもので、そこには歴史的事実をもとにして物語をつづる著者のすぐれた文才によって、有益な教訓が生き生きと述べられています。すなわち、トビト書の中には、家庭、結婚、神の摂理に関する教えが、異教の地で幽囚生活を送るトビト一家の出来事をとおして、またユディト書の中には、神の御働きが典型的なイスラエルの女性ユディトをとおして、それぞれ美しく感動に満ちた筆致で書き表わされています。それからまたエステル書の中には、エステルとモルデカイによって敵から救われた選民イスラエル人のことが、かれらの好んで祝うプリム祭の制定とともにしるされています。

トビト書もユディト書も第二正典に属する聖書であり、またエステル書も、そのギリシア語本だけにある部分は第二正典とみなされており、したがって他の第二正典聖書と同じように、いろいろの問題が見られます。これについては各書の解説の中で取り扱いました。なお、トビト書とユディト書の原本が失われているために、本訳は七十人訳を底本として、写本の選択にも意を用いました。エステル書は、ヘブライ語の部分もギリシア語の部分も、それぞれ原文から翻訳しました。

ユダヤ文学および世界文学中で異彩を放っているこれらの三聖書を、その美しさをそこなわずに、できるだけ忠実に翻訳し、みなさまのご期待に添う訳本とするために、所員一同は時間と労力を惜しみませんでしたが、聖書の翻訳上、免れるべくもない不備な点があることは、じゅうぶんに認めています。このために、読者各位のご批判とご指導を心からお願いするしだいであります。

「ことばは心の琴線にひびき、手本は人をひきつける」ということわざにあるように、本訳のトビト書、ユディト書、エステル書の読者も、原本やその他種々の訳本の読者と同じく、トビト、ユディト、エステルの言行に感じ、かれらのりっぱな手本にひきつけられて、永遠の救いの道を全うせられますように願いかつ祈るものであります。

一九六〇年　聖ペトロ聖パウロの祝日

東　京

フランシスコ会聖書研究所

目　次

旧新両約聖書名および略名……Ⅵ
凡　例……Ⅷ
トビト書……1
　解　説……2
　本文と注……24
ユディト書……83
　解　説……84
　本文と注……96
エステル書……165
　解　説……166
　本文と注……184
原文批判……242
地　図……252

旧新両約聖書の書名および略名

旧約聖書

歴史書

創世記……創
出エジプト記……出
レビ記……レビ
民数記……民
申命記……申
ヨシュア記……ヨシュア
士師記……士
ルツ記……ルツ
サムエル記上……サムエル上
サムエル記下……サムエル下
列王記上……列上
列王記下……列下
歴代史上……歴上
歴代史下……歴下
エズラ記……エズラ
ネヘミヤ記……ネヘミヤ
トビト記……トビト
ユディト記……ユディト
エステル記……エステル
マカバイ記上……マカバイ上
マカバイ記下……マカバイ下

教訓書

ヨブ記……ヨブ
詩編……詩
格言の書……格
コヘレト（伝道の書）……コヘレト
雅歌……雅
知恵の書……知
シラ書（集会の書）……シラ

預言書

イザヤ書……イザヤ
エレミヤ書……エレミヤ
哀歌……哀
バルク書……バルク
エゼキエル書……エゼキエル
ダニエル書……ダニエル
ホセア書……ホセア
ヨエル書……ヨエル
アモス書……アモス
オバデヤ書……オバデヤ
ヨナ書……ヨナ
ミカ書……ミカ
ナホム書……ナホム
ハバクク書……ハバクク
ゼパニヤ書……ゼパニヤ
ハガイ書……ハガイ
ゼカリヤ書……ゼカリヤ
マラキ書……マラキ

新約聖書

歴史書

マタイによる福音書……マタイ
マルコによる福音書……マルコ
ルカによる福音書……ルカ
ヨハネによる福音書……ヨハネ
使徒行録……使

手紙

ローマ人への手紙……ローマ
コリント人への第一の手紙……一コリント
コリント人への第二の手紙……二コリント
ガラテヤ人への手紙……ガラテヤ
エフェソ人への手紙……エフェソ
フィリピ人への手紙……フィリピ
コロサイ人への手紙……コロサイ
テサロニケ人への第一の手紙……一テサロニケ
テサロニケ人への第二の手紙……二テサロニケ
テモテへの第一の手紙……一テモテ
テモテへの第二の手紙……二テモテ
テトスへの手紙……テトス
フィレモンへの手紙……フィレモン
ヘブライ人への手紙……ヘブライ
ヤコブの手紙……ヤコブ
ペトロの第一の手紙……一ペトロ
ペトロの第二の手紙……二ペトロ
ヨハネの第一の手紙……一ヨハネ
ヨハネの第二の手紙……二ヨハネ
ヨハネの第三の手紙……三ヨハネ
ユダの手紙……ユダ

預言書

黙示録……黙

凡例

上欄の数字は原文の節。

下欄のイタリック数字はブルガタ訳聖書の節。

－ 印は上欄番号の節のはじまりを示す。ただし行の冒頭の場合には印を付さない。

〔〕印の中の数字はブルガタ訳聖書の章節。

＊ 印は付録にある原文批判の注。

トビト書

トビト書の解説

神の書としての権威をつねに保持し、かつカトリック教会内において親しく読まれている「トビト書」は、道徳の初めであり終わりである敬神と隣人愛を、実例をもって教える書である。本書はまた文学としても光輝を放っており、神の英知に照らされた人知の傑作ともいえる。

名称

本書の名称は、写本によって多少異なる。ギリシア語写本によれば、「トビト」または「トベイト」である。ただし、年代的に新しいギリシア語写本と、またシリア語写本には「トビト物語の書」となっている。これらはすべて物語の主人公父トビトの名にちなんで付けられた書名である。本訳本は、これらの写本の書名に従って、「トビト書」と題した。ブルガタ訳聖書には「トビア書」となっているが、これは同訳本が父も子も「トビア」と呼んでいるからである。

内容と区分

本書はトビトという敬けんな一イスラエル人とその子トビアおよび嫁サラに関する物語であり、十四章から成っている。第一部は、主人公トビトとトビアの身の上に起こった大きな変化について述べ、第二部は、トビトとサラの祈りが聞きいれられ、天使ラファエルがかれらを救うために神からつかわされたことについてしるし、結論として神の賛美が歌われている。

第一部（1^{1}—3^{17}〔1^{1}—3^{25}〕）　ネフタリ族出身の敬けんなトビトは、その妻アンナと子トビ

アとともにとらわれの身となり、ニネベに連れて行かれる。かれはその町で律法に従って生活し、慈善事業、特に死者の埋葬に努めるが、そのため財産をことごとく失ってしまう。また貧困についで、ふとしたことのために盲目になる。かれは妻や友人からの非難にくじけることなく、大きな忍耐をもって義人の生活を続ける。そして身内の者からも見捨てられ、また身には激しい苦痛を感じ、ついには苦難からの救いか、またはよみのくにに下ることか、このどちらかが与えられるように祈る。

他方、メディアのエクバタナでは、トビトの親族であり、ラグエルの娘であるサラが、トビトと日を同じくして、自分の下女たちから侮辱される。彼女はつぎつぎに七人の男にとつぐが、七人とも結婚の第一夜に悪霊アスモデウスに殺される。このために、「夫殺し」と下女からいたく責められた彼女は、トビトと同じく、その苦しみからのがれることができるように神に祈り、死さえも望むようになる。

第二部（4^{1}—12^{22}〔4^{1}—12^{22}〕）　死を間近かに感じたトビトは、正しい道をあゆむようにトビアを訓戒し、長年、ガバエルに預けておいた多額の金を取りにかれをつかわす。その時、トビトはわが子のひとり旅を心配して、道連れを捜すように言いつける。するとひとりの若者が現われる。これは天使ラファエルであったが、かれは自分をアナニアの子アザリアと名のって、天使であることを隠す。旅の途中、チグリス川のほとりに休んだとき、トビアは一匹の大きな魚にのまれそうになる。天使はトビアに命じて、逆にその魚を捕えさせ、その胆のうと心臓と肝臓を薬にするために取り出させる。

エクバタナに近づくや、不思議な友はサラのことをトビアに語り、かれにサラをめとるように勧める。トビアは彼女の七人の夫に起こったことが自分にも起こるのを恐れたが、天使はかれを安心させる。かれらはラグエルの家で非常に歓待され、トビアはサラを妻にもらう。悪霊アスモデウスは、ふたりが結婚した夜、トビアがくゆらす魚の心臓と肝臓のにおいで追い出され、再び帰ることはない。結婚

の祝宴は幾日も続いて盛大であった。その間、天使ラファエルはトビアの願いでガバエルからお金を受け取るためにラゲスへ旅立つ。

ついにトビアは、ラファエルがガバエルの所からもどって来るのを待って、父の家に帰るために、妻と多くのしもべを連れ、財産を携えて出発する。帰り着くやいなや、父の目に魚の胆じゅうを塗り、目を直してやる。ニネベのイスラエル人は、こぞってトビアとサラの帰りを喜び祝う。

結論（13^{1}—14^{15}〔13^{1}—14^{17}〕）　年老いたトビトは、すべての恵みを神に感謝し、神を賛美し、そして安らかに息を引き取る。トビアは母の死後、義父ラグエルの所に移り、そこで長寿を全うする。

トビト書は、原本は喪失してしまったが、異なった多くの言語で書かれたいろいろの校訂本となって伝えられている。現存するトビト書の写本中、最も古いものは、ギリシア語写本であるが、中でもいちばん大切なのは、シナイ写本とバチカン写本の二つである。この二つのギリシア語写本は、いずれも紀元四世紀ごろのものである。

原本と訳本

現存するこれらの写本の「トビト書」の起源、また校訂本相互間の関係については、学者間に大きな異論を見る。中には、ギリシア語が本書の原語であったと主張した者もいた。しかし今日では、ほとんどすべての学者が、ギリシア語ではなく、セム語系の言語、すなわちヘブライ語かアラム語を原語と認めている。

聖ヒエロニムスが、アラム語で書かれた「トビト書」について語っていること（*Praefatio in librum Tobiae*, PL 29, 23）と、またオリゲネスが、当時（ヘブライ人は「トビト書」も「ユディト書」もヘブライ語で書かれたものは持っていなかったと証言していること（*Epistola ad Africanum* 13, PG 11, 80）から、ある学者はアラム語が原語であったと考えている。これに反し、他の学者はバチカン写本、

特にシナイ写本の中に多くのセム語的な表現を認めて、アラム語よりも、むしろヘブライ語を原語とする説を主張している。なお、このいずれにも同意せず、問題をそのまま残す学者もいる。

最近、バチカン本のある箇所とシナイ本は、ヘブライ語本からの訳本であり、またこのヘブライ語本は原本アラム語からの訳本であるとする説が出ている（F. Zimmermann, *The Book of Tobit*, New York 1958, pp. 139-149）。この説に従えば、これまで説明できなかったシナイ本とバチカン本に見られる多くの特殊な点の解明が得られるばかりでなく、また種々の「トビト書」訳本や校訂本間に存在する相違、また書き入れなどに関する複雑な問題についても解答が与えられる（図表参照）。

ギリシア語本　ギリシア語の「トビト書」の写本は次の三種類に分けられる。

第一の種類の代表的なものは、かい書体バチカン写本（**B**）とアレキサンドリア写本（**A**）である。両写本のトビト書は同一の形体を有し、大体において一致している。しかし、バチカン写本は、アレキサンドリア写本に比べると、もっと古いギリシア語原本によっているように見える。なおこの種のトビト書の写本には、多くの小文字草書体ギリシア語写本と、三世紀ごろのパピルス紙写本（オキシリンコ1594. ただし、これには 12^{14-19} だけしかない）がある。この第一の種類の写本にあるトビト書が、当時、東方においても西方においても広く用いられていたことは、その数多い訳本によってわかる。二—四世紀のギリシア教父たちの引用も、これによるものであった。今日でも、それはギリシア教会で用いられており、そのギリシア語的表現は正確で、また内容も充実している。

第二の種類に属する写本はシナイ写本である。この写本には 4^{6b-19a} と 13^{6b-10a} が欠けている。この写本のトビト書は、前に述べた第一の種類に属するトビト書とかなり異なり、セム語の形跡を多分にとどめ、セム語からの訳であることを示している。

第三の種類に属する写本は小文字草書体ギリシア語写本である。特記すべき点は、6^{9}—13^{8} が本写本独特のものであるのに、他の部分は第一の種類の写本と符合していることである。

以上述べた写本のうち第三の種類の写本は、批判学的に見て価値は少ない。これに反して、第一の種類のバチカン写本と第二の種類のシナイ写本の価値は大きい。

ラテン語本

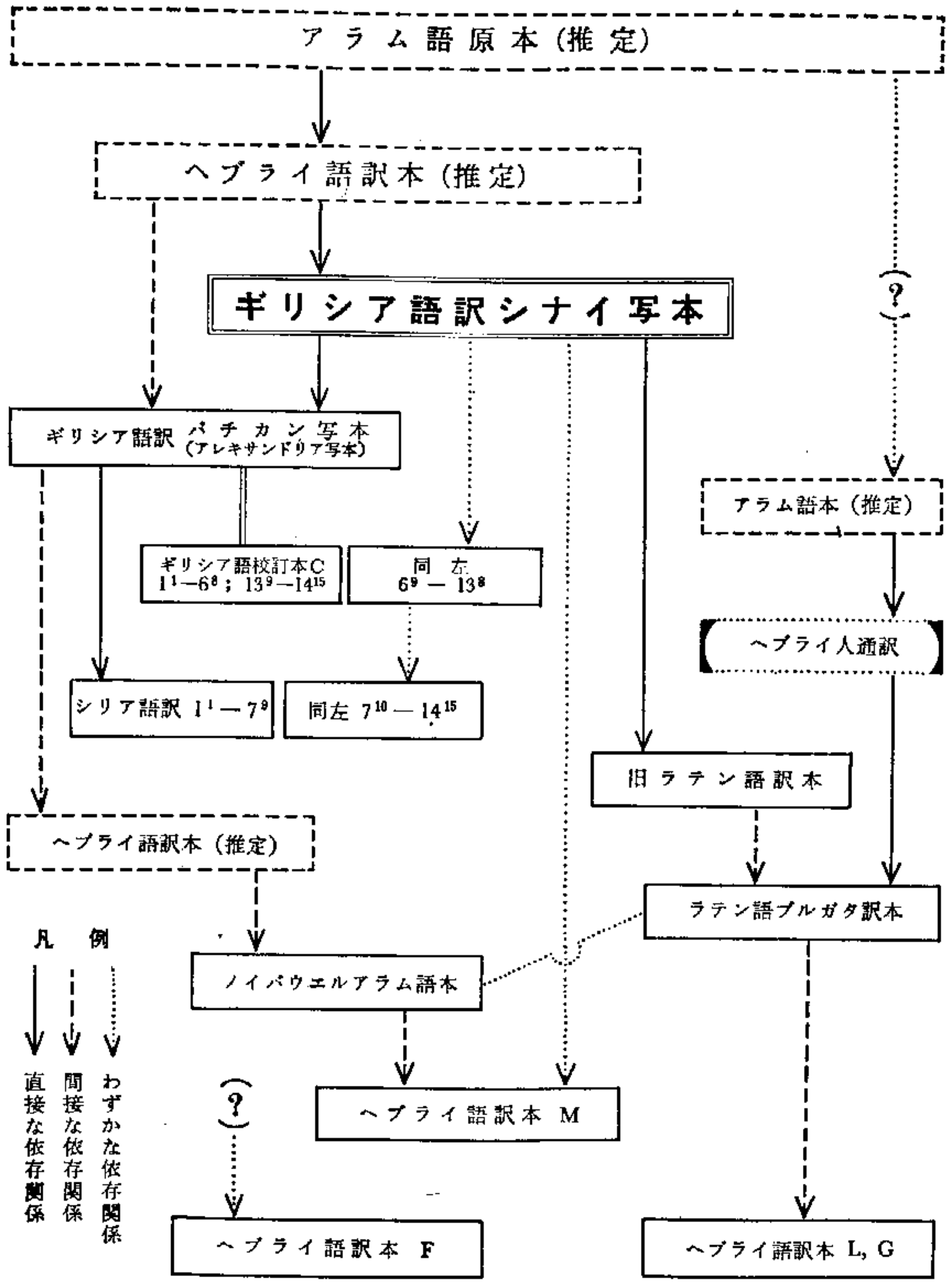
ラテン語のトビト書には、旧ラテン語訳とヒエロニムス訳の二つがある。

（一）　旧ラテン語訳の写本の数は多い。その理由は、聖ヒエロニムスが新たに翻訳して出した聖書の中に自訳のトビト書を取り入れずに、旧ラテン語訳のトビト書をそのまま残したので、旧ラテン語訳のトビト書がその後も使用されたからである。現存するトビト書の旧ラテン語訳写本の数は十五である。聖ヒエロニムス以前のラテン教父、またそれ以後の教父でも、旧ラテン語訳によってトビト書を引用している。

旧ラテン語訳がシナイ系統のギリシア語本によつていることは、だれでも認めているところであり、それは、シナイ写本の二つの脱落箇所を補なうのに役立っている。

（二）　トビト書のヒエロニムス訳は、後年、ブルガタ訳聖書に取り入れられ、現在でも教会で公に使用されている。聖ヒエロニムスが本書の翻訳に着手したのは、ふたりの司教の要請によってであった。かれは「トビト書」の序文のなかで「わたしは本書をラテン語に訳した。しかし、それはわたしが望んでやったことではなく、ただあなたがたの希望をかなえるためであった」と述べている。またかれはヘブライ語とアラム語に精通していたひとりの学者の助けをかりて、「一日で本書を訳しあげた」とも言っている。かれの訳は逐語訳ではなく、意訳であったようである。トビト書の数多いラテン語訳の中でもヒエロニムス訳は、それがアラム語本によるものであること、またその文体と表現の点で他の訳

原本と各種訳本の関係



本にまさっていることによって、貴重なものとされている。それは他の訳本の美点をすべて備えていると言っても決して過言ではあるまい。大部分の現代語訳は一般にブルガタ訳と呼ばれているこのヒエロニムス訳に基づいている。

しかしながら、批判学的にヒエロニムス訳を検討して見れば、それは原本とは少し違っているように思われる。その第一の理由は、あまり神学的な色彩が濃厚なことである。たとえば、理想的な結婚のあり方が示され（3 18–19 6 17–22）、また神をおそれ敬うことについては、長い考察がなされている（1 4–8 15 2 9 12–18 3 15–18 9 12 14 4–7 15–17）。他の理由は、ある箇所では内容を拡大し（2 12–18 3 16–23 6 16–22 7 13–15）、他の箇所では省略していることである（1 4 6–7 22–25 3 16）。このような理由で、批判学的にはその価値は落ちる。だからといって、根本的にその真正性が疑わしいとか、または教義上の価値が劣るというのではない。

セム語本

セム語のトビト書にはアラム語本、ヘブライ語本、シリア語本の三種があるが、大体において比較的新しいもので、批判学的価値は少ない。

（一）アラム語本

ヒエロニムス訳の原本となったアラム語本は現在伝わっていないが、他のアラム語本が前世紀の後半に発見され、刊行された（A. Neubauer, *The Book of Tobit, A Chaldee Text*, Oxford 1878）。それには13 14 章が欠け、要点だけしか述べられていない。編者は、その本を旧ラテン語訳よりも古いと言っているが、今日ではもっと後代のものであるとされている。ある学者は、文法と言語学的見地から、その著作年代を四—七世紀と推定している。なお、内容からして、この本はギリシア語本にではなく、ヘブライ語本によっていることがわかる。

（二）ヘブライ語本

トビト書のヘブライ語本には次の三つがある。(1) ノイバウエル編のアラム

語本に基づいた訳本（ヘブライ語 Münster）。これはワルトン多国語聖書の中にある。(2) 大部分はブルガタ訳による訳本（ヘブライ語 London）。なお、その校訂本（ヘブライ語 Gaster）も存在する。(3) ヘブライ語で物語式に書かれた「トビト書」（ヘブライ語 Fagius）。これは今日知られているどの校訂本にも依存していない。これもワルトン多国語聖書に載っている。

（三）シリア語本

この本の初めの部分（1 1–7 9）は六欄対訳聖書のシリア語訳に属し、バチカン系統のトビト書に一致しているが、後の部分はペシッタのシリア語訳に属するものである。

これまで述べて来たトビト書の諸訳本の綿密かつ批判的研究によって結論できることは、ギリシア語訳以外の訳本はすべて他の訳本に依存しており、直接または間接にギリシア語訳本にまでさかのぼるということである。したがってギリシア語訳本が最も価値あるものである。

しかし、ギリシア語訳本のおもな写本であるシナイ写本とバチカン写本の間には著しい相違が見られる。すなわち、シナイ写本はバチカン写本に比べて非常に詳しく、記述も長い。シナイ写本の語数は、七、六五六であるが、バチカン写本のほうは五、五〇八である。この二つのうちどちらが採用されるべきであろうか。事実上からいえば、両者とも広く普及している。すなわちシナイ写本は旧ラテン語訳によって伝えられ、バチカン写本はギリシア教会によって常に使用されているのである。しかし一九五二年クムランで発見されたトビト書の断片は、バチカン写本と合っている箇所もないではないが、全体的に見て、むしろ長文のシナイ写本とよく一致しているといえよう。

現代の訳者たちの大部分はシナイ写本に従ってトビト書を訳している。それはシナイ写本のほうが、表現においてギリシア的色彩が薄く、また文章もギリシア的な優雅さに欠けていることからして、もっ

とセム語の原本に近いように思われるからである。したがって、本訳もシナイ写本によったのである。ただしシナイ写本に欠けている二つの部分4^{6b-19a}と13^{6b-10a}を補うため、また本文の批判的修正のためには、旧ラテン語訳、シリア語訳、バチカン写本を使用した。

本書の文学的部類に関する問題

トビト書は次の二つの目的をもって書かれている。すなわち、義人――ここでは遠く祖国を離れて生活するイスラエル人トビト――に対する神のたえなる保護を教えることと、苦難や迫害やざんぼうにあっても、忠実に神の律法に従って生活するイスラエルの典型的義人を人々に示すこととである。

したがって、本書は何よりもまず実際生活に関する本であり、人を徳の道に進ませる。また一般向きの本であり、その中で語られる話は言い伝えられ、書き伝えられ、また他国語に訳されて、広く知られていたものである。それで、時として、特に格言や祈りの中に異質的な事がらが見られるのも不思議ではない。内容は単純で、興味深い。また倫理上のおきても、具体的に生きた模範をもって教えられているので理解しやすく、ユダヤ人およびキリスト信者の間に広く読まれている。

しかし問題は、この美しいトビト物語が史実かどうかということである。神は人々に教えるために神感によって聖書記者に史実を例に取らせることも、創作をもってさせることもできる。あるいはまた両者を混合して聖書を書かせることもできる。トビト書が神感によって書かれた聖書であることを認めない非カトリック著者の中には、トビト書を単なる創作であると主張する者が多い。マルチン・ルーテルは、トビト書を歴史的根拠のない小説、または新約聖書中のたとえ話のような、教訓的かつ詩的物語とみなしている。このルーテルの説は、多くのプロテスタントによって支持されている。

カトリックの学者の中にも、A・ショルツのようにトビト書の史実性を全然認めない者もあるが（かれはトビト書をたとえ話とみなし、トビアはシナゴーグ［ユダヤ教会］、サラは新約時代の教会と解する）、しかし大体カトリックの学者はトビト書が史実に基づく聖書であることを認めている。

トビト書が史実に基づいて書かれた本であることは、その冒頭に読まれる題名が、「トビト物語の書」（直訳は「トビトのことば」）となっていること、それから、はじめの数章は第一人称で書かれ、トビト自身が自分に起こった出来事を語っていること、また年代的にも地誌的にも周密な記述がなされていること、なお主人公のトビト家について、またアッシリアとバビロニアの慣習に従った金銭の委託方法や結婚の儀式について、詳細な記述があること（5^{3} 7^{14} 参照）などから確かである。だからといって、トビト書の各部分が、補足的な事がらにいたるまで、史実であると断定することはできない。

実際、純粋に事実だけを取り扱っている書物をヘブライ文学中に見いだすのはむずかしい。必ずそこには、宗教、道徳に関する要素が取り入れられている。これは、本書の場合も同じことである。たとえば、4^{3-21}には倫理に関する一連のおきてが広範囲にわたって述べられ、そのうちのあるものは、他のおきてといっしょに12^{6-21}に再録され、また最後に14^{8-11}にもう一度書きしるされている。

それから、本書には文学的修飾が多分にあることもいなめない。たとえば、トビトの美しい祈り（3^{2-6}）、サラの祈り（3^{11-15}）、トビアの祈り（8^{5-8}）、またラグエルの祈り（8^{15-17}）など、すべてこれらの祈りが、そのままかれらの口を突いて出たとは考えられない。また13章の詩や物語の中に折り込まれている演説や会話も、当人がそのように歌いまたは話したとは思われない。

文学的修飾は年代に関する記事にも現われている。たとえば、トビトとサラが時を同じくして試練に会ったことをしるすのに、「同じ日に」（3^{7}）と言い、それから同じ時に、天使がかれらを災いから救うためにつかわされたのを「同じ瞬間に」（3^{16}）と誇張し、そして最後に「ちようどその時」トビト

は中庭から家にもどり、サラは上のへやからおりて来た（3_{17}）と言って、すべてが同時に行なわれたように述べている。もちろん、このようなことはありうることであるが、ここでは著者が神の摂理を示そうとしてこのような表現を用いたものと思われる。

それから、人間の心理に通じていた著者は、感動的な場面を美しく描くことを知っていた。それは、旅に出た親孝行なトビアと、家でかれの帰りを待ちわびる両親の気持（10_{1-8}）、またかれが帰って来るのを遠方から認めて、走り迎え、首に抱きついて泣く母アンナ（11_{5-9}）と、盲目ではあるが、同じくかれを出迎え、そして目をなおしてもらい、首に抱きついてうれし泣きに泣く父トビト（11_{10-13}）の深い愛情の描写によくうかがわれる。これを見ても、本書が旧約聖書の中でもすぐれた文学的作品であることがわかる。

以上のような考察から、今日では、トビト書の骨子をなすものだけを史実と認め、細部は著者が文学的に創作し、記述したものであるとする説が、一般に支持されている。またトビト物語は、「人を教化する物語」といわれ、A・ミレルが言っているように、「トビト書は文学的見地からして、時として宗教的な事がらに関する教えを含んだ固有の意味での歴史書と固有の意味での教訓書との中間に位するものである」と認められている。

本書と聖書内外の文学的作品との関係

著者は思索においても、話や文の構成においても、他の聖書の影響を多分に受けており、時として同様の表現さえ用いている。たとえば、創42_{38}の「おまえたちはこのしらがのわたしを、悲しみのうちによみのくにに下らせることになる」という表現は、そのまま本書3_{10}と6_{15}に見られる。また人が死から救われることについても本書4_{10}と格$10_{2}$$11_{4}$の表現は一致している。それから、モーセの律

法、たとえば十分の一奉納（1_{6-8}）や結婚（6_{13} 7_{13}）に関するおきても忠実に守られ、再録されている。なお、トビアとサラの結婚の場面は、全くイサクとリベカの結婚を思わせる。またトビト書の天使に関する叙述は、年老いたアブラハムに現われた天使に関する創世記の記事によっているとも考えられる。年老いたトビトが、死ぬ前に自分の子トビアを旅に出したことは、アブラハムが死の近づくのを知って、イサクに妻をめとらせるために、ひとりのしもべを旅に出したことと対照的であり、またトビアがラグエルの家でサラを妻にめとったやり方は、アブラハムのしもべがリベカをイサクの妻にめとった時のやり方によく似ている（創24章）。

本書はまたその内容からしてヨブ記に類似している。両者間に叙述上の依存関係があるとは思われないが、ブルガタ訳によれば、トビトの試練はヨブの試練と同じく摂理的なものである（2注5参照）。文体は両者相異なり、ヨブ記は詩的であり、トビト書は散文的である。また前者は対話体で書かれ、悲観的であるが、後者は物語ふうに書かれ、楽観的である。両者とも、苦しみは義人に試練として与えられるものであることを知っている。しかし、トビト書はヨブ記にもまして、善業を強調し、そして神をおそれ敬い、善業を行なう人には、苦しみも神の祝福のもととなることを教える（4_{6} $_{21}$ 12_{11-14}）。

トビト書とヨブ記のおもな類似点は次のとおりである。悪の主役者、これはヨブ記ではサタンであり（1_{6}以下）、トビト書ではアスモデウスである（3_{8}）。それから、ヨブとトビト両人の妻の不平不満（ヨブ2_{9}、トビト2_{14}）、また困難と試練、それに対して与えられる祝福（ヨブ42_{11}以下、トビト11_{18}）などである。なお、文の構成から見ても、両者間には類似点がある。たとえば、両者とも話の主人公やおもな人物の紹介をもって始まり、またそれをもって終わっている（ヨブ1・2章42_{7}以下、トビト1・14章）。

「アヒカルの知恵」　次に聖書以外にも本書に影響を及ぼした書物があったかどうかについては学

者間に異論がある。中でも問題になるのは、「アヒカルの知恵」という書物である。

「アヒカルの知恵」は、昔は有名な物語の一つであった。教会著述家ではアレキサンドリアのクレメンス、教会外では、スタラボン、それからコーランもこの物語について述べている。それはシリア語訳、アラビア語訳、アルメニア語訳、エチオピア語訳、スラブ語訳、ルーマニア語訳、ギリシア語訳など、多くの訳本によって今日まで伝えられている。

アラム語で書かれた「アヒカルの知恵」のバビルス紙写本が、本世紀のはじめに、上エジプトのナイル川のエレファンティン島にあった古代ユダヤ人の居住地で発見された。この写本は紀元前五世紀にまでさかのぼる古い写本である。しかし、その原本はそれよりも一世紀以前に書かれたものと思われる。

「アヒカルの知恵」の概略をしるす前に、トビト書の中の「アヒカル」という人物について述べることは、「アヒカルの知恵」とトビト書とを比較する上において有益であろう。「アヒカル」の名はトビト書の中で、別々に次の四つの箇所にあげられている（ただし、ブルガタ訳には、ただ一箇所、すなわち第三の箇所に出るだけ）。㈠ アヒカルは「トビトの兄弟アナエルの子」で、トビトの近い親族である。かれは「アッシリア王セナケリブの時、酒人がしらであり、王の印形の保管者であり、王の家令であり、会計係であった」。またセナケリブの時も同じであった（1^{21-22}）。㈡アヒカルは、エリマイスに行くまで、盲目になったトビトを二年間養った（2^{10}）。㈢ トビアが新婚の妻とともにニネベに帰って来た時、「アヒカルとそのおいナダブ（ブルガタ訳ではアキオルとナバト、11^{20}）とが喜んでトビトの家を訪れた」（11^{19}）。㈣ 死に臨んで、トビトはトビアに最後の教訓として、アヒカルの話を思い起こさせる（14^{10}）。

「アヒカルの知恵」の内容は次のとおりである。

賢明なアヒカルはその才能を認められて、セナケリブ王（705-681 B.C.）とエサルハドン王（681-669 B.C.）の宰相となり、印形つかさ、また宮内大臣をかね勤める。子どもがなかったので、かれは姉妹の子ナダンを養子に迎える。そしてかれに自分の官位を継がせようと思って多くの忠告を与える。しかしかれはナダンに裏切られ、エサルハドン王に訴えられる。かれは死刑の宣告を受けるが、幸いにも死刑執行人に救われる。これは、かってかれがこの死刑執行人の命を救ってやったからである。王はアヒカルに下した宣告を後悔するが、あとで、アヒカルが生存しているのを知って、すぐにかれを連れて来させ、困難な使命を負わせてかれをエジプトに派遣する。そしてかれを復位させ、ナダンを死刑に処する。アヒカルはナダンが死ぬ前に、もう一度一連の忠告をかれに与える。

これが「アヒカルの知恵」のおもな筋であるが、その史実性については学者たちの間に異論がある。たとえこの物語がトビト書に取り入れられているとしても、それはこの物語の史実性を証明することにも、または否定することにもならない。しかし、物語の根底をなしているものは史実であるように思われる。そして、それが伝承されていくうちに枝葉がつけられ、現在見られるような物語になったと考えられないこともない。

トビト書と「アヒカルの知恵」の相互関係については、二つの相反する説がある。すなわち、前者が後者の源泉であるという説と、後者が前者の源泉であるという説である。しかし、今日では、トビト書が「アヒカルの知恵」よりも後に書かれ、これからある程度影響を受けたという説が一般化している。実際、アヒカルとトビトとの間には似通った点が見られる。たとえば、ふたりともセナケリブ王とエサルハドン王の時代にニネベに住んでいた。また「アヒカルの知恵」に照らしてトビト書を読めば、トビト書の不明な箇所、すなわち11^{19}と14^{10}のアヒカルとナダブ（＝ナダン）のことも判明してくる。

「アヒカルの知恵」が、古代ヘブライ人の間によく知られていた本であることは、エレファイティン

・パピルス紙写本の発見によっても明らかである。トビト書の著者は、読者が「アヒカルの知恵」を読み、または聞いて知っているのを前提として書いているように思われる。この物語が事実であるかどうかは別としても、この有名な人物アヒカルがトビトのいとことして本書の中で語られていることは、本書の重要性を増し、かつ威信を高めるために役立ったに違いない。このように、トビト書が文学的にある程度「アヒカルの知恵」に依存していることは疑いない。

「アヒカルの知恵」がトビト書と関係を有するようになったのはいつであったか、すなわちトビト書がまだ口で語り伝えられていた時か、それとも書物となった時か、また書物になってからだとすれば、原本においてか、または後の写本においてか、これらについてはまだ確かな解答は与えられていない。それからまた、トビト書の中に見られるアヒカル物語の箇所の出所も文献によるものか、または口伝によるものか断定しがたい。最後に言えることは、いかに「アヒカルの知恵」がトビト書に影響を与えたといっても、それはトビト書の史実性を左右するものではないということである。

なお、聖書以外の古い文献の中には、「不幸に見舞われた妻」、「感謝の意を表わす死者」、「ベントラシュ姫」、「苦しむ義人」など、「トビト書」の記事に類似したものが見られる。

著者

本書の著者は、他の文献や資料に全然現われない。ただ本書の批判的研究によってのみある程度推測されるにすぎない。

㈠ 南のユダ国の各支族について一言も触れていないところから、かれは北のイスラエル国に生まれた敬けんなヘブライ人であったと思われる。

㈡ かれは離散イスラエル人のひとりであったらしい。そして幽囚生活を送る同胞を励ましていたのであろう。

㈢ ブルガタ訳とアラム語本を除く他のすべての訳本では、最初の数章は第一人称で書かれている。したがって、著者はトビトまたはトビアにまでさかのぼる記録または言い伝えを使用したものと考えられる。

㈣ 本書の無名の著者は事が起こってからかなり経過して、「トビト書」を編集し、その時1[1-2]を題目として書き加え、また13章の詩と14章を付け加えたものと思われる。

記述年代

本書の記述年代を確定することは不可能であるといえよう。なぜなら、本書の内容には、批判的にその年代を確めることができないものがあるからである。たとえば、ニネベの町の破壊に関する預言を含む14[15]の記事は実際ニネベの町の滅亡してから(612 B.C.)長年月後に書かれたものと思われる。また13章と14章にはユダ国の滅亡、特に13[11]にはエルサレムの神殿の崩壊(587 B.C.)が過去の出来事としてしるされており、バビロニア幽囚時代のことが考えられる。

しかし、本書と教訓書とを比較すれば、本書の教訓的なまた勧告的な口調、および祈りの形が教訓書のそれによく似ていることがわかる(シラ7[27-28]とトビト4[3-4]を対照せよ)。したがって、本書はバビロニア幽囚時代ではなく、教訓書と同時代に書かれたように思われる。

こうして今日一般に認められていることは、本書が遅くとも紀元前二世紀、すなわちマカバイ時代の初期には書かれていたということである。なお、このことは最近死海周辺で発見された紀元一世紀、またはそれ以前にさかのぼる写本によっても明らかである。なぜなら、その写本の中に読まれるトビト書の断片は、その原本が、少なくともそれよりも一世紀以前に書かれたものであることを示しているからである。

場所

物語の舞台となっているのはアッシリアとメディアであり、時代は幽囚時代、正確にいえば、アッシリア幽囚時代である。それから、物語の聞き手はとらわれのヘブライ人である。

著者が本書をアッシリアで書いたとは全然考えられない。というのは、著者が全くこの国の地理に通じておらず、一度も訪れたことがなかったように思われるからである。かれが書いていることの中には、実際のことと一致しないところがある。たとえば、かれはエクバタナとラゲスの間は徒歩二日の道程であると言っているが（5 6）、アレキサンドロス大王はそこに進軍した時、十日を費やしている。

また本書の記述場所はエジプトでもないようである。なぜなら、本書の原本はセム語であり、また8章6節には、悪霊アスモデウスがサラから離れ「エジプトのはてへ逃げ去った」とあるからである。その上、本書にしるされているユダヤ人に対する迫害も、プトレマイオス時代のエジプトにおけるそれとは縁遠い。

それから、著者が遠く祖国を離れて生活するのを余儀なくされ、郷愁の涙をそそっているところを見れば、本書がパレスチナで書かれたとも考えられない。著者は13 14章で神が異教の国に散在するイスラエル人を再び祖国に連れ帰ることを確く信じ、たびたび希望をあらわしている（13 3 5 6 13）。著者のあこがれのまとはエルサレムであり、著者は幽囚の生活を送った同胞とそこで再び会合し、自由の天地を楽しむ日を待ち望んでいる（14 5）。

したがって、ジンメルマンが提唱しているように（前掲書20ページ）、トビト書の記述の場所はユダヤ人離散地の一つであったと思われる。それはシリア地方、特にアンティオコス四世エピファネス（175–164 B.C.）時代の大都市アンティオキアであったように推察される。この王の治下にユダヤ教徒に対

する残酷な迫害が行なわれ、神殿はけがされ、人々は殺害され、かれらの血は祭壇の周囲に注がれ（マカバイ上1 24 37）、死体の埋葬は禁じられていた（マカバイ下9 15）。確かにこの時代のイスラエル人にとって、トビトの敬けんとあわれみ、また律法遵守の話は生きた模範となり、かれらを奮い立たせたに違いない。

正典性

旧約聖書には第二正典と呼ばれる七つの書があるが、トビト書はその一つである。七十人訳聖書にはトビト書はいつもユディト書、エステル書と前後して書きしるされているが、普通は聖書の歴史書または教訓書のうしろに置かれている。ヘブライ人の正典には本書は含まれていない。しかし、本書は、その多くのヘブライ語訳本によってもわかるように、ヘブライ人の間で非常に賞揚されていたものである。

聖ヒエロニムスも本書を高く評価している。しかしその正典性に関しては、ヘブライ人の正典目録に従って、消極的な態度を取り、「トビト書」は人の教化には役立っても、信ずべき教義を証拠立てるものとしては使用できないと言っている。

あるギリシア教父も、本書を聖書の正典中に数えないで、教化に役立つ書物の中に加えている。しかし、かれらが言う「正典」とは、ヘブライ人との論争において使用できる聖書だけをさすのであって、厳密な意味でトビト書などの正典性を否定するのではない。

教会は本書を常に聖書として取扱い、正典中に数え入れている。考古学的モニュメント、特にカタコンブには他の聖書と同じく、本書から取材した絵も見られる。また紀元四、五世紀ごろのギリシア語写本には、その全文が読まれる。

本書の正典性は教会の会議によって決定的に肯定された。聖書の保管者であり、かつ唯一の教師であ

る教会は、ヒッポ（393）、カルタゴ（397; 419）で行なわれた公会議、およびフィレンツェ（1441）、トリエント（1546）、バチカン（1870）で行なわれた三つの万国公会議において「トビト書」の正典性を確認した。

本書には、全聖書に共通の教訓が美しい物語ふうに、また説得するようなことばでしるされている。

本書の教訓

神について　神は「天と地の主、万物の王」、「天の王」であり、その支配からのがれうる者はだれもいない（10[14]13[13]）。かれは人々をこらし、よみのくにに投げ入れるが、その反面、慈愛深く、人々をよみのくにから救い出すおん者である（13[2]14[5]）。かれは時間と空間を超越して存在するおん者であるが、また同時にイスラエルの歴史に介入する。かれはイスラエル人が再び自由の天地を楽しむことができるようにするであろう（13[15]）。しかし、かれらの救いはかれらの改心にかかっている（13[6]）。神の行ないは、ことごとく深い神秘に包まれている。神の偉大なるみわざを賛美し、人々にも賛美させるのは、何と輝かしいことであろう（12[7]11[4]13[4-9]）。

天使について　天使は神の玉座に仕え（12[15]）、義人の善業と試練をよく知り、かれらの祈りを神に取り次ぐ（3[16]）。また時として神から特別の使命を受けて派遣される（3[17]5[17-21]12[14]）。

天使または守護の天使に関する教えは、天使ラファエル派遣の時に初めて知られたのではない。それは古くから教えられていた。アブラハムに現われた三人の天使や、ロトを救い出したふたりの天使（創18—19章）などはよく知られていた。また守護の天使に関しては、個人の守護の天使（創24[7]28[12]）、民全体の守護の天使（出23[20]32[34]）、都市の守護の天使（ザカリヤ1[12]）、異教国の守護の天使（ダニエル10[13-20]）などが聖書にしるされている。天使の中でもよく知られていた天使は、ガブリエルとミカエルで

あるが（ダニエル8[16]10[13]参照）、後代の聖書外典（たとえばエノク書）には、その他に多くの天使の名が読まれる。しかしラファエルの名は聖書では本書だけに見られる。

悪霊について　人々は神と天使に対しては深い信頼を持っていたが、悪霊に対しては強い恐怖の念をいだいていた。これは本書の物語によくあらわれている。不浄の悪霊アスモデウスはサラの七人の夫を殺す（6[15]）。この物語には世俗的な考えもいくぶんかまじっていて、サラに対する悪霊の愛が暗示され、またさばくや不毛の地が悪霊の国とみなされている（8[3]参照）。

悪霊が人間に有害な存在であるということは、人祖の堕落の記事にもよく示されている（創3章、知2[24]参照）。悪霊は時として野獣の姿を借りて現われる（イザヤ13[21]34[14]）。そしていろいろの名で呼ばれているが、中でも最も一般的な名はサタンである。本書に出る悪霊アスモデウスは他の聖書には見られない。

倫理・道徳について　本書全体を貫いている道徳の理念は、まだ旧約聖書のそれである。たとえば、おきての遵守に関しては、むしろ現世的動機がさきに立つ。「善業をしなさい。そうすれば悪があなたがたを見いだすことはないでしょう」（12[7]）。そこには、幸福、富、子宝に恵まれること、名声を博すること、これらすべての現世的な善は、善行の報いとして与えられるものであることが教えられている。

しかし所有物や財産に対するトビトたちの態度は、まことに高潔である。貧者に対しては寛大であり（4[7]）、また結婚の契約においては、富と財産の分譲はすべてラグエルに一任してしまい、アザリア（天使ラファエル）に対しては、契約金の金額どころか、持ち帰った財産の半分をお礼として与えようとするほど（12[2-5]）寛大である。富や財産はかれらにとっては生活の手段であって、目的ではないの

である。

義人トビトが実行に励む正義は、「各人に各人のものを与える」という大原則に基づいている。かれは、雇い人への賃金支払いを明日まで延ばしてはならない、と命じる「申命記」のおきて（24 15）を重んじて、実行に移し（4 14）、社会正義、配分正義の模範をしめす。

またトビアが結婚に際して、「わたしが、この妹をめとるのは、決して情欲のためではなく、まごころからです」（8 7）と祈って言ったことは、理想的な結婚は肉欲によらず、愛によって行なわれるべきことを教えるものである。

トビト一家に見られる美しい愛情や相互の義務観（4 3 4 6 15 16 参照）、また親族の間のあたたかい愛情と犠牲の精神は、教訓に富んだものである（5 13 参照）。

最後に、本書には「兄弟」という語がおよそ四十八回しるされている。この語は、すべての人を神における兄弟姉妹とみなす深いキリスト教的人間観に基づいた美しいことばである。それは、あるいは外国人に対して（5 11 12）、あるいは物語に登場する人物に対して用いられている。このキリスト教的人間観は夫婦に対しても適用され、夫は妻を「妹」と呼び、妻は夫を「兄」と呼んでいる（7 15 8 4 10 6 13）。

人の教化を主眼とする本書は、また「祈りの本」とも呼ばれるほど、多くの美しい祈りをもってつづられており、主人公たちの唱える祈りによって物語は生きている。盲目となり、妻から非難され、悲嘆にくれて、泣いて祈るトビトの祈り（3 1–6）、また下女から侮られるあわれなサラの悲痛な祈りには（3 11–15）、試練にあっても神をおそれ敬い続けるかれらふたりの心情がよくあらわれている。青年トビアが、自分の妻となって悪霊アスモデウスの手から救われたサラとともに、神の慈愛と恩恵を祈るそ

の祈りは（8 5–7）、かれらの敬けんさを示すものであり、それに続くラグエルの祈りは（8 15–18）、神があわれみと恵みの神であることを証している。そして最後の祈りは（13 2–18）、視力を回復したトビトが、これまでのいろいろの試練の後、再び子トビアを見ることができたばかりでなく、嫁サラや天使さえも見ることができて、喜びと感謝に満ちて唱えたもので、その中には預言も含まれている。教会はこの祈りを聖務日課に取り入れ、火曜日の賛課に唱えている。

「とこしえに生きたもう神は、賛美されますように。そのみ国は限りなく続く。……イスラエルの子らよ、異邦人の前で神に感謝しなさい。……楽しみ喜べ、正義の子らのゆえに喜びなさい。もろびとはつどいきたり、永遠の主を賛美します。……エルサレムの門は喜びの歌をうたい、その家々は『アレルヤ、イスラエルの神は祝せられるように』と言います。祝福された人々はとこしえにいつまでも、その聖なるみ名をあなたのもとで賛美するでしょう」。

ユディト書の解説

ユダヤの女傑ユディトの名にちなんで「ユディト書」と名づけられる本書は、危険にひんしていたイスラエル人が、どのようにして彼女の英雄的行為によって救われたかを物語り、永久に忘れることのできない出来事としてそれを書きしるした聖なる書である。

内容と区分

本書は劇的内容を持ち、三部に分けられる。

第一部（1―7章）　敵に攻められるユダヤ　物語はアッシリアの王ネブカドネザルとメディアの王アルファクサドとの交戦をもって始まる。ネブカドネザルはアルファクサドを打ち破るために、エリマイから、西はエジプト、エチオピアに至るまで、世界の国々に使者をつかわして同盟を要請するが、かれのこの要請はかなえられない。それにもかかわらず、かれは連戦連勝、ついにメディアの首都エクバタナを陥落させ、アルファクサドを殺害して、完全に支配権を獲得する。

大勝利を得て、神の座を占めるようになったネブカドネザルは、総司令官ホロフェルネスに命じて、同盟を拒否した西方の国々を撃たせる。ホロフェルネスの軍隊は、至る所で略奪と殺害をほしいままにし、国々を荒廃させる。フェニキア人も、またツロからガザにかけての沿岸地方の人々も降伏し、ホロフェルネスは名高いエスドレロンの平野まで進軍する。今や、かれの前にあるものはサマリアの山々だけで、エルサレムはかれの掌中にあると言ってもよい。

イスラエル人は危険を知ってあわてはじめる。エルサレムの大司祭ヨアキムは布令を出して、山間道路の守備を堅固にさせ、国難を免れるために人々に断食と祈願を命じる。

ここで著者は物語をもっと興味深くするために、新しい人物を登場させる。アンモン軍の大将アキオルがそれである。近隣の国々の将軍を招集して、軍事会議を開き、作戦を練っているホロフェルネスに向かって、アキオルは長々とイスラエルに関する情報を伝え、イスラエル人がその神に忠実である間は、かれらに向かう敵なしと言って、攻撃を開始しようとしているホロフェルネスに注意を促す。しかし、ホロフェルネスの軍事会議は一致して「ネブカドネザルのほかに神なし」と叫んで、アキオルの提案を破棄し、かれを死罪に定めて、敵イスラエルの手に渡すためにベツリアの山のふもとに置きざりにする。

アキオルはベツリアの警備隊員に捕えられ、イスラエルの民の首脳部のもとに連れて行かれる。かれはそこでホロフェルネスの会議の模様を一部始終物語る。これを聞いて、かれはアキオルを助け、かつ保護する。こうして、戦いはホロフェルネス軍のネブカドネザルとイスラエルの神との戦いになる。これはエゼキエル書（38―39章）に見られる黙示的記述、またはクムラン写本の「光の子とやみの子との戦い」を思わせる。

著者は話をもとにもどし、ホロフェルネスの戦術とベツリアのかしらたちの動静について述べる。ホロフェルネスはアンモンとモアブの同盟軍の勧告に従って、水源を占領し、ベツリア人を飢渇攻めにする。かわきに苦しむベツリア人たちは飢えとかわきで死ぬよりもただちに降服して捕虜となるのを望む。しかし、かしらたちはまだ希望を捨ててはいない。それで、五日間の猶予を設けて、事態を解決することにする。かれらの降服は今や時間の問題となった。

第二部（8—13章）　ユディトはホロフェルネスの首を取る　ユディトは数年前からやもめ暮らしをしていた若いイスラエルの一女性である。彼女は賢明で、かつ敬けんであり、しかも勇気に満ちている。やもめとなってからは、つねに祈りと断食に日を送っていたが、自分の国が危険にさらされているのを知り、民のかしらたちを集めて、神に対する信仰を振るい立たせ、イスラエルの国と聖なる都エルサレムのために一身を投げ打って戦わなければならないことを説く。また同時に、自分が秘密の計画を持っており、必ずそれを決行することを告げる。

ユディトは行動に移る前に、神の助けを求めるために父祖シメオンの神に熱烈な祈願をささげる。そして、祝祭日の晴れ着を身にまとい、ひとりの侍女に律法の定める食糧を持たせて、ベツリアをあとにアッシリアの前衛部隊のほうに進む。前衛部隊まで難なく至り着いたユディトは、やがてホロフェルネスの面前に通され、その美しい容ぼうとみつのような甘いことばでかれを魅了する。

それから三日は過ぎ、四日目に至ってついに好機が与えられ、ユディトはホロフェルネスの酒宴に招かれる。そして宴会が終わって、みながそれぞれ部署に帰って行くと、彼女は酔い倒れになったホロフェルネスとふたりきりで天幕に残る。今こそ時きたれり、とばかりユディトは心をこめて神に最後の祈願をささげ、ホロフェルネスのまくらもとに掛かっていたかれの剣を取り、全身の力をふりしぼってかれの首を切り落とす。それから、侍女にその首を袋の中に隠し持たせて、敵の陣地を出て、ベツリアに帰る。

第三部（14—16章）　アッシリア人の敗北とイスラエル人の勝利　ベツリア人は勝利を聞かされ、喜びのうちに夜は明ける。かれらはイスラエルの民をあわれみ、かつ助けてくださる神に感謝をささげる。町のかしらであるオジアはユディトを祝し、アンモン人アキオルはホロフェルネスの首を見て驚き、イスラエルの神を認め、割礼を受けて、ユダヤ教に改宗する。

五日目に、さしものアッシリア軍も、巨将ホロフェルネスの首を取られて、ろうばいし、われさきにと逃げはじめる。イスラエル軍はかれらを追撃し、全滅させる。

こうして、イスラエルは完全に勝利を得、エルサレムからは大司祭ヨアキムと長老たちがベツリアに下って来て、ユディトに感謝し、かつその功績をたたえる。ユディトは神に感謝するために祝賀行列の先頭に立って、勝利の歌をうたい、行列を指揮する。行列はエルサレムまで続き、そこで人々は敵の分どり品を神に奉納する。

ユディトは、その後ベツリアの自分の家に帰り、人々の尊敬のうちに百五歳の長寿を全うし、夫のかたわらに葬られる。なお、ブルガタ訳（16[31]）はユディトによってもたらされたこの大勝利を記念する祝日について語っている。

原本と訳本

ユディト書の原本と訳本に関する問題は、トビト書の場合とよく似ている。ユディト書のヘブライ語原本は喪失し、ギリシア語訳と、またそれに由来するシリア語訳、アルメニア語訳およびラテン語訳しか現存していない。

（一）　本書の原本がヘブライ語で書かれたものであったことは、ギリシア語訳を一読すれば、わかることである。ギリシア語本の文の構造や語句の配列は、ヘブライ語的であり、かつ反復の多いこと、それから、そこにしばしば見られるヘブライ語特有の表現の文字どおりの訳などがそのおもな証拠である。またそこに用いられている語類の乏しさは、原本がギリシア語本ではなく、ヘブライ語本であったことを示している。

現在伝わっているヘブライ語のテキストは、原本のテキストではなく、訳本から再びヘブライ語に訳

し直したものである。(A. M. Dubarle, "Les textes du livre de Judith," *Vetus Testamentum* 8 (1958) 344-373 参照)。

(二)　ギリシア語訳本は三つの校訂本となって伝わっているが、相互間の相違は著しい。

(1)　第一校訂本は主としてバチカン写本、アレキサンドリア写本、シナイ写本から成るもので、ギリシア教会が使用しているのはこれである。現代のユディト書の訳本は、ほとんどみなこの校訂本に基づいており、本訳もラルフス編の「七十人訳」にあるこの校訂本によった。

(2)　第二校訂本はいくつかの小文字草書体写本から成っている。アンティオキアのルキアノスの校訂本とヘシキオスの校訂本はこれに属する。

(3)　第三校訂本の主なものは小文字草書体写本58号である。旧ラテン語訳とシリア語ペシッタ訳はこれに属する。

(三)　ラテン語のブルガタ訳は、聖ヒエロニムスがギリシア語からではなく、アラム語から訳したものである。かれはその序文の中で、ギリシア語写本の間には多くの相違があり、そのためにアラム語本を使用したと言い、また「逐語訳よりも、むしろ意訳を行なった」と述べている。なお、ブルガタ訳は、語句や文体の点で旧ラテン語訳に近似していることから、聖ヒエロニムスが、旧ラテン語訳も参照したということがわかる。

ブルガタ訳は根本的にはギリシア語本と一致しているが、附随的な事がらに関しては、著しい相違がある。すなわち、本文の省略、補足、位置変更などがかなり多く、また固有名詞や数字の相違も少なくない。これらの相違については、おおかた注にしるしておいた。一般的にいって、ブルガタ訳はギリシア語本に比べると約五分の一ほど短い。

本書の文学的部類に関する問題

聖ヒエロニムスは、本書を歴史書の中に数えているが、「列王記」や「歴代史」などの純歴史書と同列においていない。実際、本書が厳密な意味での歴史書であるか否か、その解答は、本書に述べられている歴史的または地理的な事がらに関する問題のために容易ではない。

(一)　歴史的な問題　本書はネブカドネザルの名をおよそ二十回しるし、またかれがアッシリアの王であり、ニネベで支配していたと述べている。しかし、歴史的人物のネブカドネザル王は、新バビロニアの王で、その治世は紀元前六〇四年から五六二年までであり、この時には、アッシリア王国はすでに滅亡していた。またニネベも紀元前六一二年に崩壊している。それからまた、本書に述べられている出来事は、確かにバビロニア幽囚以後、または神殿の再建後に起こったもので（4 3 5 18-19参照）、歴史上のネブカドネザル時代以後のことである。このほか、本書によればネブカドネザルは、メディアの王アルファクサド（この王については本書以外に知るよしもない）と戦い、エクバタナを攻撃しているが、歴史上のネブカドネザル王は、メディアと交戦したこともエクバタナを征服したこともない。

(二)　地理的な問題　本書は、ネブカドネザルの総司令官ホロフェルネスの進軍経路を示しているが、それを地図の上で確認することはほとんど不可能である。そこにしるされている多くの地名は地理的にも知られていない。このことは、物語の舞台となり、その時の戦いにおいて最も記念すべき町となったベツリアについても同じで、この町の名は本書以外では全く知られていない。

以上のような歴史的、地理的問題のために、本書が文学上どの部類に属するかについて批判学者の説はそれぞれ異なる。そのおもなものをあげると次のとおりである。

(1)　本書はすべて歴史的事実を伝えているとする説　この説はある一部のカトリック学者の間に

唱えられている。そのおもな理由は伝承の尊重にある。ユダヤの伝承も、また教父や聖書注釈者による伝承も、十六世紀ごろまでは一致して本書の歴史性を認めていたからである。かれらは、前述の問題についてもある程度満足のいくような解答を与えている。

(2) **第一の説と全く反対で、非カトリック学者の間に多く見られる説**　これによれば、本書は訓導を主とした一種の創作である。マカバイ時代に生きていた本書の著者は、事実を物語ろうとして本書を書いたのではなく、敵に勝利を得て、政治的独立を確保するためにイスラエル人を激励し、指導しようとして本書の創作に従事したのである。このため、本書には律法の遵守と神に対する忠誠が勝利の唯一の条件としてもっぱら強調されている。

(3) **折衷説**　この第三の説は、現代のカトリック学者の間では最も一般的な説である。これによれば、本書はトビト書と同じく、物語の骨子をなす史実に、教訓的な創作を加味して文学的にも美しく、かつ興味深く書きつづられた歴史文学である。

このように、カトリック学者は本物語の史実性を、少なくともその根底において認めているが、しかし物語の出来事が起こった時代と場所を判定するのは、それほど容易ではない。まず考えられることは、著者が他の人名や地名をもって本物語の人物や町の実名を隠しているということである。著者は何か理由があって、すなわち便宜上、または象徴的に表現するために、そうしたものと思われるが、この場合、それらの別名によって示される人物や場所は、今日のわれわれにとっては理解しがたいが、当時の読者には明らかであったに違いない。

さて、本物語の歴史性に関する先決問題は、「ネブカドネザル王」についてであろう。すなわちこの名がだれをさしているのかが判明すれば、本物語の時代も歴史もおおかたわかるようになる。このネブ

カドネザル王に該当すると思われる王または皇帝は、アッシリア王アダト・ニラーリ三世（810－783 B.C.）からローマ皇帝トラヤヌス（98-117）までの間に二十数人いる。中でもいちばん該当性の強いのは、ペルシア王アルタクセルクセス三世オコス（358-338 B.C.）である。

その理由として次のことがあげられる。(一) 聖書以外の資料によっても明らかなように、アルタクセルクセス三世は数度小アジア、フェニキア、エジプトなどに遠征し、またかれの将軍にはカパドキアのアリアラテス王の兄弟ホロフェルネスとかんがんバゴアスがいた。それからある遠征の時、エリコの町を占領し、一部のユダヤ人を捕虜としてカスピ海沿岸のヒルカニアに捕えて行ったことも歴史的に明らかである。(二) 物語に見られる表現は、ペルシア的表現で、アルタクセルクセス三世時代によく用いられたものである（2[7]とその注参照）。(三) また偶像崇拝は当時ユダヤ人の間には全く行なわれておらず（8[18]）、律法はよく遵守されていると本書にしるされていることは、バビロニア幽囚以後のことで、同じくアルタクセルクセス三世の時代に該当するものである。

したがって、ユディト物語の出来事の舞台となっているのは、アルタクセルクセス三世オコスの時代であるといえよう。著者は本事件の中心をなす事がらに重点を置き、時代、人名、地名などにはとんちゃくせず、本物語を書き表わし、そして神の手足となって活躍するユディトの言行をもって神学的な教訓を教え、かつ当時大きな危険に臨んでいたその民に、神に対する信頼を説いている。

要するに、本書の物語の史実性に関する三つの説のうち、第三の説が最も正しいように思われる。本書を歴史的かつ教訓的な書物と認める第三の説は、一方では本物語の歴史性をある程度是認することによって教会の伝承に従い、他方では物語の骨子となっているものだけを史実とすることによって、極端に史実性を強調する第一の説が当面する歴史的、地理的難題を避け、または適切に説明する。同時に、

第二の説の極端さを緩和する。

著者と記述年代　本書の著者ならびに記述年代については他のいかなる資料によっても全くこれを知ることができない。しかし、本書自体の批判研究によって知られることは、著者がパレスチナ出身のユダヤ人であったことである。というのは、本書の原本がヘブライ語であり、それから著者はイスラエル民族とその教えをことのほか賛嘆し、アキオルがイスラエルの民になした称賛のことば（5 5-21）やユディトの美しさに対するホロフェルネスとその将士たちの賛辞（10 19 11 23）を喜んで書きしるし、また戦闘が展開される地方の地理によく通じているからである。

さらに、著者は本物語の事件当時の人ではなく、かなり後代の人である（16 25 参照）。なぜなら、本書全体に、宗教上の清めに関するファリサイ的な宗教心やギリシアの慣習を暗示するもの（15 12 とその注参照）、また紀元前二世紀の前半に書かれたシラ書と類似している神学的教え、および熱烈な愛国心が見られるからである。また当時はユダヤの政権は大司祭の手にあった時代である。したがって、本書の著作はマカバイ時代、すなわち紀元前二世紀の終わりごろと推定される。

正典性　トビト書と同様に本書も第二正典の中にはいっている。本書はその原語がヘブライ語であったところを見てもわかるように、ユダヤ人のために書かれたものであり、ユダヤ人たちが高く評価するところのものであったが、神感書としては取り扱われず、かれらの正典目録から除外された。しかし、七十人訳聖書には正典として取り入れられており、教会もそれを認めている。

教父たちは最初から本書を、特にユディトがホロフェルネスの首を切るその感動的な箇所を好んで引

用している。ローマの聖クレメンスは、コリント人にあてたその書簡の中で「幸いなるユディト」について語り、またアレキサンドリアのクレメンスやオリゲネス、またテルツリアヌスや聖アウグスチヌスも彼女について語っている。

そのほか、重要なすべてのギリシア語写本は、本書を他の歴史書といっしょに書き伝えているが、これは本書に関するギリシア語系の東方伝承を証するものである。

とはいえ、本書に対するユダヤ人の軽視的な態度に影響されて、小アジアやパレスチナの教会、あるいはまた西方の教会においても、教父や教会著述家中のある人々が、本書の正典性について疑問を有したことは事実である。しかしながら、教会の会議、中でもヒッポ（393）とカルタゴ（397）の公会議によって、またインノチェンチウス一世の親書「Ad Exsuperium」（405）によって、西方教会では正典性に対する疑いは取り去られた。東方教会においても、トルロスの公会議（692）で本書の正典性は認められた。そしてそれはフィレンツェ（1441）とトリエント（1546）両万国公会議において公式に再確認され、宣言された。

本書の教え

ユディト書は歴史と道徳に関する神学書の美しい一ページをなすものである。

インマヌエル　そこにはイスラエルの民とともにいます神とイスラエル人の宗教行為がよく描かれている。

イスラエルの神はその民の歴史の中につねに現存し、かれらが神と結んだ契約に忠実であるかぎり、かれらとともに戦い、かれらを敵から守り、かれらに勝利を与える。ネブカドネザルとホロフェルネスをもって代表される異教徒は、破壊される偶像の神々とともに滅んでいく（3 8 4 1）。これに反して、一神教を固く信奉し、生ける神を礼拝するイスラエル人は（13 17）、勝利を歌う。イスラ

エルの生ける神は、天地を造った（13[18]）天の神（5[8]6[19]）、水の造り主、全被造物の主（9[12]）であり、特にインマヌエル（神はわたしたちとともにの意。13[11]とその注参照）であって、イスラエルはかれの民、かれの世継ぎである。

宗教行為　宗教行為には積極的なものと消極的なものとの二種がある。積極的な宗教行為は、信心、敬けん、祈りなどに見られ、これらの根本となっている神に対するい敬の念は、本書に強調して述べられている（8[8]）。大司祭や司祭たち、また人々は神の助けを求めるために、また敵を滅ぼすために地にひれ伏して祈る。かれらは危険を免れ、大勝利を得て神に感謝する時も同様に地にひれ伏す。

消極的な宗教行為は、罪を避けることである。罪こそ、神がその民から離れ、かれらを敵の手に渡す唯一の原因である。罪さえなければ、また律法に違反しなければ、イスラエルの民は安全であり敵を恐れることはない。

まさに本書は、イスラエルの歴史の流れをくむものであり、イスラエルを導く神の摂理はその中にまざまざと具現されている。神の摂理はつねにかれらを取りまく。神はかれらが危険にさらされている時、かれらをご自分の世継ぎとして顧み、救いの手をさし伸べられる。その時、神が選んだのはかよわいやもめのユディトである。しかし、ユディトは終始万事を神の摂理にゆだね、子どものような単純さで神の導きに信頼して、手には何らの武器を持たず、もっぱら神の力により頼んで敵陣にはいり、敵将の首を取り、大勝利を博する。全く彼女は、神のありがたい摂理によって導かれる全イスラエルの象徴であるともいえる。

また彼女によって神のたえなる摂理がよく示されていることも注意すべきである。すなわち神は偉大

なことをさせるためにご自分に忠実な小さき者、かよわき者を選び、物の価値を転倒させて、ご自分のみいつを表わされる。このことを最もよく示しているのが聖母マリアである。ナザレのはしためマリアは神から特別に選ばれて、原罪の汚れを免れ、ひとりイスラエルの民のためばかりでなく、全人類のために悪魔に対して永遠の勝利を得たのである。このために教会は、エルサレムの大司祭とイスラエルの人々が勝利者ユディトをたたえて歌ったその同じことばで、無原罪の聖母マリアをたたえて歌う。

「あなたはエルサレムの栄え、
あなたはイスラエルの大きな誇り、
あなたは民の大きな誉れである」。

エステル書

エステル書の解説

エステル書は旧約聖書中、他に類例のない特殊な書物である。というのは、プリム祭が本書の重点をなし、また本書のヘブライ語本には、宗教と道徳に関する教えらしい教えは見られないからである。このような通俗的趣味の強い書物は、一見したところ、ヘブライ民族特有の教育や宗教観とは非常にかけ離れているようであるが、しかしながら、民族主義に基づくユダヤ精神がそこに示されていることは争われない事実である。

名称

本書のヘブライ語原本には、「メギラト・エステル」（エステル巻物）または本書がメギラト中のメギラトともいうべきものであったところから単に「メギラト」という表題が付けられている。「メギラト」は羊皮紙に書かれた聖書の五つの巻物を意味するもので、それには、過越祭に読まれる「雅歌」、ペンテコステ祭に読まれる「ルツ記」、エルサレムの滅亡をいたんで読まれる「哀歌」、幕屋祭に読まれる「伝道の書」、およびプリム祭に読まれる「エステル書」がある。

「エステル」は本書の物語の女主人公のバビロニア名またはペルシア名である（2注5参照）。

聖書の順序に関しては、本書は写本や教父たちによって、ある時は教訓書、ある時は預言書、ある時は歴史書のあとに付録のような形で載せられ、ある時はトビト書とユディト書の後に、ある時はそれらの前にしるされ、その位置は一定していない。

内容と区分

ヘブライの若い女性エステルを女主人公とする本書の物語は政治的な色彩が強い。出来事はユダヤ人が敵から、征服され捕虜となって異国に連れて行かれた時代に起こったものであり、物語の場所はアハシュエロス王国時代のペルシアの首都スサである。

1—2章　アハシュエロス王、すなわちクセルクセス王（1注2参照）は、その治世の第三年目に重臣たちを招いて酒宴を開く。その時、王妃ワシテは王の命令を拒んで列席せず、そのために王妃の地位をはく奪される。そしてワシテに代わってエステルが新たに選ばれて王妃となるが、彼女がヘブライ人の娘であり、またモルデカイの親族であることはだれも知らない。王妃エステルはユディトのように美しく着飾って王の気に入り、またモルデカイが自分に告げた陰謀者のことを王に知らせる。

3—7章　次にハマンが物語に登場する。かれは王の信任があつく、栄誉に満たされ、宰相の位にあげられる。人々はかれの前にひれふすが、ユダヤ人モルデカイだけは少しも敬意を払わない。このために、ハマンはユダヤ人撲滅の勅令を王に願い、それを発布する。この恐るべき日は、プリムすなわちくじによって、アダルの月の十三日と定められる。

これを知ってモルデカイは、王妃エステルに同胞ユダヤ人を救うために王に取りなすように勧告する。エステルは三日間の祈りと断食の後、王のもとに行き、王がハマンとともに自分の酒宴においでくださるように願う。一方、ハマンは先に発布した勅令の実施の準備をし、モルデカイをはりつけにする木もととのえる。

ここで場面は変わり、王についての話となる。ある晩、王は眠れないままに国の年代記を読ませるが、その中にモルデカイについての記録があった。王はモルデカイが陰謀者から自分の命を救ったこ

と、またそれに対してまだ何も報いが与えられていないことをその時にはじめて知り、かれにじゅうぶんな報いを与えて、その功績をたたえようとする。しかし、モルデカイを称賛し、栄誉あらしめるための特命を王から授かったのは、皮肉にもモルデカイの敵ハマンである。

話はまたもとにもどり、王はエステルの願いをかなえて、ハマンといっしょに彼女の酒宴にあずかる。その席上で、エステルは自分の身がらをあかし、自分の同胞であるユダヤ人が、ハマンによって滅ぼされようとしていることを告げ、王の助けを求める。王はこれを聞いて、即座にハマンを罰し、モルデカイのためにハマンが用意していたはりつけの木にハマン自身をかけるように命じる。

8—10章　この最後の部分は、ユダヤ人の勝利と本物語の結びである。王妃エステルには悪逆無道なハマンの全財産が、またエステルのいとこモルデカイにはハマンが占めていた宰相の地位が与えられる。エステルはハマンが先に発布した王の勅令によって、ユダヤ人が滅ぼされることのないように、もう一つの勅令を王に願う。当時、王の勅令は取り消し不可能なものとされていたので、エステルが願ったのは、前勅令の取り消しではなく、前勅令と反対に、ユダヤ人に自己防衛権と殺害権を与える新勅令である。エステルの願いはかなえられ、各州のユダヤ人たちはハマンがユダヤ人撲滅の日と定めたアダルの月（第十二の月、すなわち二〜三月）の十三日に、多くの敵を殺害し、その翌日には勝利の祝賀を行なう。しかし、首都スサのユダヤ人たちは、エステルの好意によって十四日にも敵の殺害をほしいままにし、一日遅れて十五日に祝いを行なう。モルデカイはこれを永久に記念するために、毎年アダルの月の十四日と十五日をプリム祭、すなわちユダヤ人救済の大祝賀の日と定める。

以上は、本訳が底本として採用したヘブライ語のエステル書による内容である。なおこのほかにギリシア語のエステル書には次のようないわゆる第二正典の部分があるが、これらはみなラルフスの「七十

人訳」に従って翻訳した。すなわち、前置きとして、モルデカイの夢と侍従の王に対する陰謀がしるされ（1^{1a-1r}〔$11^{2-12^{16}}$〕）、それから、ユダヤ人撲滅の勅令（$3^{13a-13g}$〔13^{1-7}〕）、王妃エステルに対するモルデカイの勧告（4^{8a-8b}〔15^{1-3}〕）、モルデカイとエステルの祈り（$4^{17a-17z}$〔$13^{8-14^{19}}$〕）、王の前でのエステルの嘆願（$5^{1ギ-2b}$〔15^{4-19}〕）、ユダヤ人救済の新勅令（$8^{12a-12x}$〔16^{1-24}〕）、モルデカイの夢の解明（10^{3a-5k}〔10^{4-13}〕）がそれぞれ書きしるされ、最後に、あとがきとしてエステル書のギリシア語訳に関する証言（10^{3l}〔11^{1}〕）がある。

原本と訳本

本書は主として二つの形で教会に伝わっている。すなわち、ヘブライ語の短いエステル書とギリシア語ならびに旧ラテン語訳の長いエステル書がそれである。

この長短二種のエステル書の問題は、直接エステル書の原本の問題に関連するもので、これについては後に詳述する。

本書の数多い写本の中で、より重要なものは、ヘブライ語写本、アラム語写本、ギリシア語写本、ラテン語写本である。

（一）　ヘブライ語写本の数も多いが、それらはだいたいにおいてよく一致しており、大差はない。したがって、批判学的には、ヘブライ語本が最も正しいといえよう。現存する本書のヘブライ語写本中、紀元十一世紀以前のものはない。

アラム語写本は、原本そのままのものではなく、むしろ講釈的なものである。なお、アラム語写本には、二種のタルグムがあるが、その一つ、第一タルグム（紀元七〇〇年ごろ）は、かなり原本に忠実で、文法的注釈をわずかに施しながら、原本を逐語的に書き伝えている。もう一つの第二タルグムは、想像を用いて原本に多くの加筆を行なっている。これができあがったのは紀元八〇〇年ごろで、当時、

ユダヤ人の間に非常に愛読され、どのラビたちも聖書講釈にあたってこれを使用した。

（二）　現存するギリシア語写本は、本書のあとがきによれば、エルサレムのブトレマイオスの子リシマコスの訳本である（10 3l）。これは、そのあとがきの記事からして紀元前二世紀の終わりごろまたは同じく一世紀の前半に完成したものと思われる。文体は比較的に優雅であり、特にギリシア的な事がらの叙述にいたってはそうである。現在二つのギリシア語校訂本が伝わっている。一つは特にシナイ写本、バチカン写本、アレキサンドリア写本などに書きしるされている七十人訳本で、ヘブライ語の短いエステル書の訳のほかに純然たるギリシア語の部分もいっしょに取り入れている。他の一つは、ルキアノスの校訂本で小文字草書体で書かれたいくつかの写本の中に見られる。これは七十人訳本を校訂したものである。

（三）　最後に、ラテン語訳本について述べよう。旧ラテン語訳は直接ギリシア語の原本から訳されたもので、紀元前二世紀の半ばごろ完了している。この訳本には、他の種々のギリシア語校訂本からの長い追加がある。また現在のどの写本にも見られない次のような書き入れもある。すなわち3 15 にはユダヤ人の長い祈りが（同注15参照）、また4 1 にはモルデカイが荒衣をまとっているのを知った時のエステルの苦しみが、それから同じく4 17m には、その時のエステルの祈りが（同注18参照）、それぞれ折り込まれている。これらの追加は、それ自体からしてギリシア語本によるものであることがわかるが、しかし原本によるものではなく、おそらくユダヤ人たちの手に成る古代原本講釈書からのものと思われる。

なお、ラテン語訳には、ブルガタ訳と呼ばれる聖ヒエロニムスの訳がある。聖ヒエロニムスは、原本としてヘブライ語本を用い、それにないギリシア語七十人訳の部分、すなわち第二正典の部分を終わり

に付録として訳して載せた。すなわちこのヒエロニムス訳（ブルガタ訳）の 1 1—10 3 はヘブライ語本によるもので、それ以下の 10 4—16 24 は七十人訳によるものである。聖ヒエロニムスは、自分がエステル書をヘブライ語本からラテン語に忠実に文字どおりに訳した、と次のように序文の中で述べている。「エステル書が、いろいろの翻訳者によって傷つけられたことは、よく知られているところである。しかし、わたしはヘブライ語本に基づき、逐語的な文字どおりの翻訳を行なった。……何も付け加えることなく、ただ忠実な証人として、ヘブライ人のこの物語を、ヘブライ語本にあるようにそのままラテン語に翻訳した」。この証言にもかかわらず、ヒエロニムス訳には、今日伝わっているマソラ本には見られないことばや語句がある。それらの多くは、文意をもっと明らかにするために付け加えられたものであるとしても、なおこのほかに、聖ヒエロニムスが原本として用いたヘブライ語本は、現存のマソラ本とは異なるものではなかったろうか、ということも考えられないことではない。

ヘブライ語本とギリシア語七十人訳の関係

短文のヘブライ語エステル書と長文のギリシア語七十人訳エステル書との関係については、多くの難問が残されている。プロテスタントの人たちは、ヘブライ語本によるエステル書だけを原本によるものとして認め、七十人訳に見られるその他の部分、すなわち、七十人訳にあってヘブライ語本にない純ギリシア語本の部分は、後の付け加え、または偽作として簡単に問題を解決している。これに反して、カトリック側は、ヘブライ語本のほうも、また七十人訳だけにしかない部分も、いずれも正典として認めている。これについてのカトリック学者のおもな説は次の三つである。

（一）　七十人訳本の中に翻訳されているヘブライ語本の部分とそうでない部分とは、いずれもモルデカイ自身によって書かれたと思われる一つのヘブライ語本（9 20 参照）またはアラム語本に基づくもの

であり、今日伝わっている短文のヘブライ語本は、その要約のようなものである。そしてそれは、世俗的なプリム祭に読まれる関係上、神の名や宗教的な記事はいっさい省いている。

（二）　エステル書の原本は現在のヘブライ語本である。この説によれば、著者は後代の人でこの本を書くためにモルデカイとエステルの書き物（$9^{20\,29\,32}$）、またペルシア王歴代記（$2^{23}6$-1）を資料として用いた。なおリシマコスは、このヘブライ語原本に従って本書をギリシア語に翻訳すると同時に、ヘブライ語原本の著者が用いた同じ資料を再び使用して第二正典の部分を取り入れ、現在の七十人訳のエステル書を作成した。

（三）　現代の多くのカトリック学者が主張する説で、エステル書に二つの原本を認める。すなわち、最初に、口伝、または記録によって、簡潔なヘブライ語のエステル物語と、もっと詳細な叙述をしたギリシア語のエステル物語の二つの本ができあがった。そして後に、リシマコスはこのヘブライ語のエステル書をギリシア語に翻訳する時、最初のギリシア語のエステル書だけに見られる部分をそれぞれ適当な箇所に組み入れ、現在の七十人訳の中にあるギリシア語のエステル書を作成した。したがって、この説によれば、エステル書には、ふたりの聖書著者がいる。すなわちヘブライ語とギリシア語の二つの原本の著者である。このヘブライ語原本は、今日まで伝わっているが、ギリシア語原本は消滅し、ただ七十人訳に取り入れられた部分だけが残っている。旧ラテン語訳は喪失したギリシア語原本の訳である。

以上述べた三つの説のうち、第三の説が最も正当のようである。問題となるのは、七十人訳にはあるが、ヘブライ語本にはないといういわゆる第二正典の部分であるが、これは第三の説によって、よく解答できる。実際、批判的に検討してみれば、七十人訳にだけ見られる問題の部分は、ヘブライ語本からの訳ではなく、もう一つの原本からの書き入れであることがわかる。なぜなら、それにはヘブライ語本

と重複したり、相違したりしている箇所が、多々あるからである。たとえば、ギリシア語本の1^{1m-1r}の記事は、2^{21-23}にもしるされているが、両者の間には、相いれることのできない相違がある。また王の勅令に関しても重複がみられる（ヘブライ語本の3^{13} 8^{11-12}と、ギリシア語本の$3^{13a-13g}$ $8^{12a-12x}$）。なおギリシア語本による第二の勅令（$8^{12a-12x}$とヘブライ語本のそれ（8^{11-12}）とは、ことば使いや文体の点で非常に異なっている。

したがって、七十人訳のエステル書は、ヘブライ語原本からの訳と、またもう一つのギリシア語原本を合わせ用いて編集されたものというべきである。

正典性

キリストの降誕以前の資料には、エステル書に言及しているものは一つもない。ただ、マカバイ記下$15^{36(37)}$に、「モルデカイの日」ということばが見られることによって、ヘブライ語本のエステル書が当時すでにヘブライ語正典の中にはいっていたのではなかろうか、と考えさせられるだけである。このような推測はともかくとして、ユダヤのラビたちがおよそ紀元九十年ごろに開かれたヤムニア会議においてヘブライ語本のエステル書をヘブライ語正典中に数え、以後預言書よりも尊び、モーセの律法書と同格に置くようになったことは事実である。しかし、かれらは、ヘブライ語本にはなく、ギリシア語本にだけしるされているエステル書の部分を、聖書の正典とは認めていない。ユダヤ人のこの態度は、そのままプロテスタントによって受け継がれている。

これに反して、カトリック教会は、最初からギリシア語七十人訳をそのまま全部聖書の正典と認めてきた。そして、本書の正典性に関してもユダヤ人たちが正典中に入れているヘブライ語のエステル書も、また七十人訳にだけ見られるギリシア語のエステル書の部分も、ともに正典と認めている。すなわ

ち、前者を第一正典、後者を第二正典と呼んで区別しても、それは単なる便宜上の区別であって、本質的な相違を意味するものではない。ローマの聖クレメンス、アレキサンドリアのクレメンス、オリゲネスなどの教父たちも本書の引用に際しては、七十人訳に従い、両者を区別せず、聖書として取り扱っている。中には、サルデイスのメリト（＋194）や聖アタナシウス（＋373）などのように、第二正典の部分を疑った教父もいたが、それは他の特別な理由によるものであった（トビト書の解説 19 ページ参照）。聖ヒエロニムスもまたそのうちのひとりであったが、かれは聖書の翻訳にあたって、本書の第一正典の部分ばかりでなく第二正典の部分もラテン語に訳して、付録として同じく聖書に載せている。

ついにトリエント万国公会議（1546）は、エステル書の正典性を認めたヒッポの公会議（393）とフィレンツェの万国公会議（1441）の意向をくみ、ヘブライ語本のエステル書も、また七十人訳の中にあるいわゆる第二正典の部分もともに正典として公式に認め、かつ宣言した。

上述したとおり、本書は独立した二種類の本、すなわちヘブライ語本とギリシア語本によって伝えられている。であるから、まずヘブライ語エステル書について述べ、次にギリシア語本について論述することにする。

記述の年代、著者

（一）　ヘブライ語本の記述年代について、その文体や内容からは確実な論証は得られない。そこには、ペルシア時代の風俗、習慣も生き生きと描かれているが、著者は事件発生当時の人ではなく、ずっと後代の人のように見うけられる（1 1 4 11 8 8 10 2 参照）。また、離散のユダヤ人に言及している 3 8 はかれらの離散がはるか以前から続いていたということを思わせる。なおまた、本書全体は、民族主義的な精神で貫かれている一方、他方では迫害される義人のために好転する事情を根本テーマとして取り上げているところから、本書は教訓書時代に属するものであることがわかる。なお、もっと正確に時代を表わすとすれば、それはマカバイ時代、すなわち紀元前二世紀の半ばごろに書かれたものと推定される。

ヘブライ語エステル書の著者は、確かにユダヤ人である。ある教父たち、また現代でも幾人かの学者たちは、本書の著者はモルデカイ自身であると言っている。しかし、著者自身 9 20 23 29 で明白に自分とモルデカイを区別しており、また本書の批判的研究によってもモルデカイは著者でないことが判明しているので、今日では、右のような説を支持する者はいない。著者の名は不明であるが、かれはパレスチナの一住民であり、おそらく探求心に燃えて東方の国々に旅したものと思われる。

（二）　次に、ギリシア語本のエステル書は、異教の王の支配下に置かれ、物質的にも宗教的にも王の恩恵なしには、正しい生活を送ることのできない状態にあった離散のユダヤ人のために書かれたものである。このようなユダヤ人の特殊な事情を考慮に入れて、本書の著者は、異教徒の反感を買うような殺害や復しゅうに関する事がらは避け、もっぱらユダヤ人の平穏な生活を強調している（8 11 とその注参照）。この点、ヘブライ語エステル書とは大いに異なり、宗教的色彩が強い。このことは、特にモルデカイとエステルの祈りの中によくうかがわれる。

以上の考察から、ギリシア語のエステル書の著者は、ギリシア語の世界に育った離散のユダヤ人のひとりで、おそらく当時多くのユダヤ人がいたエジプトのアレキサンドリアに住んでいたものと思われる。かれは、リシマコスがヘブライ語のエステル書をギリシア語に訳す前にギリシア語のエステル書を書きあらわしていたに違いない。このギリシア語原本の中にあるいわゆる第二正典の部分を、リシマコスはヘブライ語本からの自分のギリシア語訳に合わせて現在七十人訳にあるギリシア語のエステル書をつくったものと考えられる。

リシマコスのギリシア語訳は、プトレマイオス八世（116～108 B.C.）、またはプトレマイオス十四世

（51～47 B.C.）の治世中になされている（10注8参照）。したがって、その前に書かれたギリシア語原典は、紀元前二世紀の後半、または同じく一世紀の前半に書かれたものと結論することができる。

史実性に関する問題

本書を教化のための単なるつくりばなしとみなす者もあるが、しかし本書が文学上歴史書の部類に属することは、トビト書とユディト書の場合と同様に一般に認められている。本書の物語の史実性に関しては、本書を厳密な意味での歴史的事実の記録であるとする説と、歴史的事実に枝葉を付けた物語とする説とがある（トビト書解説10 11ページ、ユディト書解説89 90ページ参照）。この二つの説のうちで、今日最も多くの支持者を有するのは第二の説である。

一見したところ、第一の説の主張者が言うように、本書は「歴代史」や「列王記」と同じく、出来事をそのまま書きしるしているように思われる。また、使用した史料の名も忠実にあげている（10 2）。著者は、当時のペルシア王国の慣習について正確な叙述を行ない、また王の勅令や法令は、州ごとに、民ごとに、それぞれ異なる文字とことばで書きしるされて、公布されたと言って（3 12）、広範囲にわたる当時のペルシア大王国を示している。

それから、城と町（3 15）、また王宮と婦人室を区別しているが（2 13）、これも歴史や考古学の教えるところとよく一致している。なおまた、著者はペルシア王朝に最も関係の深い人物の名まえと年代も明確にしるしている。当時王座にあったのは「アハシュエロス王」であるが（七十人訳には「アルタクセルクセス王」となっているが（1 1a の批判注参照）、それはダレイオス・ヒスタスペスの子クセルクセス一世のこと）、かれの性格について本書がしるしていることはヘロドトスの証言と合っている。

しかし、本書全体の話には誇張があり、事実に合わないような記述も少なくない。たとえば、王はあ

まりにも衝動的であり、どこまでも重臣たちにあやつられているという点、また王が王妃ワシテを退けてエステルを王妃に迎えたのは、ワシテが王の気まぐれな命令に従わなかったからであるといわれるようなことがこれである。ちなみに、歴史上知られているクセルクセスの王妃は、アメストリスである。それからこの王は、何の熟慮もせずに重大な事がら、たとえば民の殺害など（8 11 以下）を裁下する。なお、ユダヤ人撲滅の勅令（3 13）は、当時の寛大なペルシア王国の国是にもとるものと思われる。このほか、王がエステルの素性や彼女とモルデカイとの血族関係を全然知らなかったということは、モルデカイがエステルに勧告するために行き来しているのを見ても、理解しがたい。そればかりではない。もしモルデカイが、本書にしるされているとおり（1 1c）、ネブカドネザルの治世下に（598 B.C.）エルサレムから捕えられて行ったとすれば、本書の事件発生の時、すなわちクセルクセスの治世（486～465 B.C.）の時には百歳以上の老人だったことになる（2注4参照）。

これによってもわかるように、本書の記事全部を史実と認めることはできない。だからといって、本書を全くのつくりばなしとすることも、本書に見られる歴史的な事がらに反することである。したがって、第二の説のように、話の骨子だけを史実と認め、他は著者の創意によるものとするほうが、最も正しいと思われる。

実際、本書の物語の骨子として歴史的に認められるべきものには、事件そのものと、またその場所と時代とおもな人物とがある。事件はユダヤ人迫害者とユダヤ人救済者との間の出来事であり、場所はペルシア王国の首都スサ、時代はクセルクセス王の治世下（486～465 B.C.）である。おもな人物としては、クセルクセス王とその王妃、宰相ハマン、ユダヤ人モルデカイがあげられている。王は、柔弱で、感情的な性格の持ち主であり、かつ独裁的な、残忍極まる君主である。それから、宰相のハマンは、ユ

ダヤ人の敵であり、かれの悪らつさは言語に絶する。ユダヤ人モルデカイは、愛国心に燃えており、ハマンに敵対して、自国民を救う。それからまた、エステルも温順で、自分の民族を救うためには一命すら惜しまないけなげなユダヤ女性である。

こういった事がらを基礎にして、著者はユダヤ人に対する神のありがたい摂理の物語をつづるのであるが、物語中のおもな出来事に関しての描写はまことに美しい。たとえば、王妃ワシテの追放（1 9–22）、エステルの王妃被選（2 15–18）ユダヤ人撲滅の勅令（3 7–15）、ユダヤ人救済のためのエステルの英雄的行為（5 1–8）、ハマンの敗北（7 2–10）、ユダヤ人の復しゅう（9 1–16）、これらは読者の心を沸き立たせずにはいない。また事件の起こった場所や環境の描写も巧みであり（1 1–8 2–14）、思いのままに筆を用いて、物語を進める（5 3–8 9–14 6 1–13）。それから、話を浮き立たせるために尊敬に満ちたことばを繰り返して用い（1 19 3 9 5 4 7 3 8 5 9 13）、またある時は実際には意味のないことばも使っている（5 3 7 2）。また「王」、「王の」、「王国」などの語、また聖なる数「七」は、絶えず繰り返し用いられる。

要するに、著者は筆の達者な人で、その豊かな想像力にまかせて、物語を興味深くつづったものといえよう。著者は歴史家というよりは、むしろ劇作家といった感じである。このために、本書は大衆文学中の宝ともいわれ、異邦人に対するユダヤ人の勝利を保証する神の摂理の新たな証拠でもある。

プリム祭

本書の物語はプリム祭の制定をもって終わっているが（9 20–32）、実際にこの祭典は本書がしるしているようにエステル物語に起源を有する純ユダヤの祭典であろうか。もしそうではないとすれば、どのようにしてこの祭典はエステル物語と関係をもつようになったのであろうか。その起源を検討すれば、この祭典は異教の世界、とりわけバ

ビロニアまたはペルシアで始まったものと思われる。そしてこの祭典は全国的な特別な祭典で、アダルの月の後、すなわち正月一日に行なわれていたようである。

プリム祭が元来バビロニアまたはペルシアの祭りであったと推定されるのは、この祭りの名称がバビロニア語の「プル」（くじの意）に由来するものであり、バビロニアでは新年祭は吉凶を占うためのくじを引いて祝われていたからである。また祭りの中心地がペルシアの首都スサだったこともこれを証明しているようである。

このように本書のプリム祭がその起源において異教的な祭りであったとすれば、どのようにしてこの祭りはエステル物語と関係をもつようになったのであろうか。これについてはいろいろの説明があるが、中でも次のような説明が適当だと思われる。

バビロニアで幽囚生活を送っていたユダヤ人は、おそらくしだいにバビロニアのこのプリム祭、すなわち新年祭をかれらといっしょに祝うようになったに違いない。しかしながらペルシア王アハシュエロス（＝クセルクセス）の時代に至り、首都スサにおいてユダヤ人がモルデカイとエステルの助けによって危難から救われるという大きな出来事が起こってから、ペルシアのユダヤ人はこの記念すべき日をプリム祭の少し前に、すなわちアダルの月の十四日と十五日に毎年祝うようになった。このように最初のうちは、かれらのこの記念すべき救いの日はプリム祭と別々に祝われていたが、後ではいっしょになり、プリム祭の名で元日に祝われるようになった。この合併によって、ユダヤ人のプリム祭はもはやペルシア人のプリム祭のように単なる新年祭ではなく、民族的な新しい意義を持つ祭りとなった。

ペルシアでの幽囚生活を終えて祖国パレスチナに帰ったユダヤ人たちは、かれらがバビロニアで祝っていた民族的な意義のこもったこのプリム祭を続いてパレスチナでも祝った。しかし、やがてかれらは

その生活を純ユダヤ的なものにするために、これまでかれらが用いていたバビロニア暦を捨てて、かれら独自の新暦をつくった。これによってこれまでの元日はもはや元日ではなくなり、プリム祭は新年祭としての意義を全く失うに至った。こうしてプリム祭はユダヤ人救済の記念日、すなわちアダルの月の十四日と十五日に変更して祝われるようになった。

ついにマカバイ時代に至って、おそらくユダヤ人の敵ニカノルの大敗北を見たパレスチナの一ユダヤ人は、プリム祭にちなんでよく知られていたエステルとモルデカイの物語をプリムの祝典に公に読ませて、ユダヤ人の絶えざる勝利を歌うために初めてこれをヘブライ語で書き表わした。かれは著述に当って、この物語の場面をより激烈に描き、その時の殺害は七万五千にも及んだと書きしるして、プリム祭をユダヤ人の大勝利の祝典とした。

なお祝祭の名称に関しては、ユダヤ人の習慣としていかに功績があり、記念すべき人物であっても、その名が公に祭りにつけられることはなかった。過越の祭りがこのよい例である。この祭りはモーセの名で呼ばれることは決してない。このようなユダヤの慣習に従って、エステルとモルデカイの功績は一般にプリム祭の名でたたえられていた。しかしただマカバイ記下の著者だけが例外としてこのプリム祭を「モルデカイの日」と呼んでいる（15 36(37)）。これはマカバイ記下の著者が個々の人物に重きを置いて書いていたためであろう（S. Tedesche and S. Zeitlin, *The Second Book of Maccabees*, New York 1954, p.23 参照）。とにかくフラビウス・ヨセフスが証言しているように、紀元一世紀の後半にプリム祭は、その名をユダヤ人の祝日表に記入され、ユダヤ人の大祝賀の日として祝われていた。なお、今日でもプリム祭はユダヤ人たちの間で盛んに祝われている。

宗教的意義

本書の宗教的意義は、ギリシア語本の中には明白に読み取られるが、ヘブライ語本、すなわち第一正典の部分には秘められた形式で知らされている。このために、第一正典のエステル書には宗教的意義は全然認められない、と繰り返していわれもし、またエステル書は異邦人に対する憎悪心を燃え立たせる書であり、存在しないほうがよいとさえいわれたほどである。

しかし、エステル書は聖書の正典に列せられている聖なる書物であり、その存在はなぞのようなものでもなければ、またやっかいなものでもない。確かに、第一正典のエステル書は、一度も神について明らかにしるしていない。著者は、神の名をしるしたり、宗教的なことばや事がらを書きしるすことを恐れているようにも感じられる。どうして著者がこのように神や宗教に関することばを極力避けたかといえば、それは、プリム祭のためであったろうと思われる。すなわち、プリム祭は起源において異教の祭りであり、その祝典中に朗読されるエステル書にユダヤ人の神と宗教がしるされることは、大きな不敬であり、汚聖であると考えられたからであろう。

神の名は第一正典のエステル書にしるされてはいないが、エステル物語中の出来事全体を支配しているのは神自身である。すなわち、神の摂理に導かれてモルデカイは、太祖ヨセフ（創45 5-8）のように、神の民を救うために選ばれ、後に宰相となる。またこの同じ目的のためにエステルも王妃となる（4 14）。ユダヤ人に対する神のこのような摂理をわかって、エステルとモルデカイをはじめ、すべてのユダヤ人は神のあわれみにあずかるために断食を行なう。

このように、エステル物語のすべての場面と出来事は、たとえ単なる自然的動機によるものにすぎないとみえても、そこにはユダヤ人たちが理解してきたように、神の導きと救助の手が働いているのであ

る。ギリシア語本もタルグム注釈者たちも、エステル書にこのような宗教的意義を認め、明言している。なおこのほかに、本書はイスラエル民族の不滅、すなわち永遠の奇跡であるイスラエル民族の超越的生命力について、またかれらが神の選民であることについても教えている。

最後に、本書の著者によるモルデカイの夢の解明によって本書の物語の主旨は宗教心を燃え立たせることにあったことがわかる（10 3a—3k）。夢には二つのくじがあった。一つは選民イスラエルのため、他の一つはすべての国々に関するものであった。神は「義の民」である選民を救うために御助けをお与えになるのである。したがって、本書の物語は、たとえ宗教的な表現をもって書きつづられていなくても、宗教的かつ超自然的な事情によって語られている宗教的な物語であるといえよう。神の摂理は、ことばの上には表われていないが、エステル書全体にみなぎっている。モルデカイのことばには（4 14 参照）、神の摂理に対するゆるがない信頼が、まざまざとあらわれており、次の詩編 121〔120〕4 7 のことばがエステル物語の主題にふさわしいとさえ思われる。

「見よ、イスラエルを守るおん者は、
まどろむことも眠ることもない。
ヤーウェはあなたをすべての悪から守護し、
あなたの命をお守りくださる」。

原文批判

次の批判注は、本訳が底本としたA・ラルフスの批判的研究による SEPTUAGINTA（七十人訳）第四版を基礎とする。ただしヘブライ語本のエステル書に関してはR・キッテル版に基づく。

略号表

R	ラルフス編のギリシア語原文
㊇	マソラ本（ヘブライ語）
㊥	ギリシア語写本一般
㊥A	アレキサンドリア写本
㊥B	バチカン写本
㊥S	シナイ写本
㊅	ペシッタ訳（シリア語）
㊄旧	旧ラテン語訳
㊄	ブルガタ訳（ラテン語）
○写	○の中の文字が示す聖書のうちで異なった読み方をする若干の写本のこと。

トビト書

1 2 【シャルマネセル】 ㊄旧 ㊅による。㊥では「エネメサル」。

〃 4 【セフェト】 ㊄旧による。㊥では「フォゴル」。

【わたしの先祖】 これはシナイ写本においては本節の「ダビデの家」のあとに、重複誤写されている。本訳でははぶいた。

1 8 【第三の十分の一】 ㊥B ㊄旧 ㊅による。㊥S にはない。

1 9 【アンナ】 ㊥B ㊄旧による。㊥S にはない。

1 10 【後にゆるされて】 これをヘブライ語原本のギリシア語訳者は、ヘブライ語の「ガアル」（解放する、ゆるす）を「カラー」（追放する）と混同しているようである。

1 14 【ラゲス】 ㊥B ㊄旧による。㊥S にはない。

〃 4 20 【子】による。本節では「兄弟」となっている。

1 20 【さえも】 ㊥S では「（妻アンナとむすこトビア）以外」。しかしこれは 2 1 の内容と一致しない。アラム語の「レホド」には、「以外」と「もまた」の両義がある。ヘブライ語に訳すとき、第一の意味にとり、そのままギリシア語に訳したものと思われる。

2 2 【主を】 ㊥B ㊥A による。㊥S にはない。

2 11 【布と毛を織り】 ㊄旧による。㊥S にはない。

3 5　【先祖】 ⓢB ⓛ旧 による。ⓢS にはない。

3 8　【しめ殺した】 ⓢB ⓛ旧 による。ⓢS では「殺した」。

3 15　【わたしをかえりみ……聞かないようにしてください】 ⓢB ⓛ旧 による。ⓢS では「主よ、わたしの侮辱を聞いてください」、すなわち「侮辱を受けているわたしをかえりみてください」の意。

4 3　【わたしが死んだら】 ⓢB ⓛ旧 による。ⓢS は本節全体に三人称複数を用いている。ラルフス編によれば、「正義を行なうすべての人々」は、ⓢB でも ⓢS でも同じく7節の初めに見られる。

4 6　【もし……栄えるであろう】 ⓢB による。

4 7　【おまえの持ち物で施しをしなさい。貧しい】 ⓛ旧 による。ⓢB は「貧しい」のことばの前に「また施しをする時、惜しそうな目をしてはいけない」を補う。

4 8　【子よ、できるかぎり施しをしなさい】 ⓛ旧 による。ⓢB にはない。

4 17　【おまえのパンを裂きなさい】 ⓛ旧 による。ⓢB にはない。

4 19　【どんな人も】 ⓢB は「どんな民も」。本訳は、この ⓢB のことばをヘブライ語からの誤訳と推定して、これを訂正した。

〃　【すべてのよいもの】 ⓢB による。ⓢS は「よい助言」。

5 3　【わたしはその一つを取り、他の一つを】 ⓛ旧 による。ⓢS にはない。

〃　【わたしがまだ生きている間に】 ⓛ旧 による。なお ⓢB 参照。ⓢS はあなたが帰って来る時まで」。しかし、この ⓢS の句は前句にかかっている。

5 6　【エクバタナは……あります】 ⓛ旧 による。ⓢS にはない。

5 12　【あなたは雇い人……尋ねるのですか】 ⓛ旧 による。ⓢS にはない。

〃　【あなたの部族】 ⓢB による。ⓢS ではこの代わりに「真理」。14 節も同じ。シナイ写本の訳者が「部族」というヘブライ語を、「真理」と読み誤ったのであろう。

5 14　【部族】 ⓢB による。ⓢS は「真理」。前注参照。

5 17　【トビアは……整え】 ⓛ旧 による。ⓢS にはない。

5 22　【かれ】 ⓛ旧 による。ⓢS は「かれら」。

6 10　【かれら】 ⓢB ⓛ旧 による。ⓢS は「かれ」。

6 12　【父は彼女を愛しています】 ⓛ旧 による。ⓢS は「彼女の父はすばらしい」。

6 15　【悪魔が彼女を愛している】 ⓢB ⓛ旧 による。ⓢS にはない。

6 18　ヘブライ語の子音の別の分け方による。ⓢS は「あなたにとって」。

7 1　【かれら】 ⓢA ⓛ旧 による。ⓢB ⓢS では「かれ」。

7 2　【トビト】 ⓢB ⓛ旧 による。ⓢS は「トベイ」、すなわち「トビア」。

7 11　【慈悲と平安】 12節の末文の同じことばを加えて意味を明らかにした。原文は「主があなたがたになさるでしょう」。

7 14　【印を押した】 ⓢA ⓛ旧 による。ⓢS にはない。

8 3　【エジプトのはて】 ⓢB による。ⓢS は「上エジプトのほう」。

〃　【帰って来た】 ⓛ旧 による。ⓢS は「足かせをかけた」。

8 7　【主よ、あなたはご存じです】 ⓛ旧 による。ⓢS にはない。

8 13　【彼女】 ⓛ旧 による。ⓢS は「かれら」。

8 15　【ラグエル】 ⓢB による。ⓛ旧 は「かれ」。ⓢS は「かれら」。

8 15 【とうとい】 ⓡ旧 による。 ⓢ にはない。
〃 【あなたのすべての聖人と被造物】 ⓢB による。 ⓢ にはない。
8 20 【誓って】 ⓢB ⓡ旧 による。 ⓢ にはない。
9 5 【らくだ】 ⓡ旧 による。 ⓢ にはない。
9 6 【天の主】 ⓡ旧 による。 ⓢ は「主が……大の祝福」。
〃 【彼女の父母】 ⓡ旧 による。 ⓢ は「あなたの父と、妻の母」。
10 4 【こんなに遅くては】 ⓢB による。 ⓢ にはない。 ⓡ旧 は「どうして遅いのだろうか」。
10 7 【何も食べないで】 ⓡ旧 による。
10 12 【抱き、接ぷんして】 ⓡ旧 による。 ⓢB には「抱き」はない。
〃 【しゅうとと、しゅうとめを敬いなさい】 ⓡ旧 による。 ⓢB は「しゅうとたちを敬いなさい」。
ⓢA は「しゅうとのもとに行きなさい」。
10 13 【主が……導き】 ⓡ旧 による。
〃 【あなたがた】 ⓡ旧 による。 ⓢ は「わたしたち」。
10 14 【トビアはラグエルとその妻エドナを祝福し、「主が……与えてくださいますように」と言った】
ⓡ旧写 による。 ただし「エドナ」は ⓢB による。 ⓡ旧 では「アンナ」。 ⓢ は「トビアは、『かれらを一生の日々、敬う恵みがあなたに与えられますように』とかれに言った」。
11 3 【彼女がわたしたちのあとから来る間に】 ⓡ旧 による。 ⓢ は「かれらが来る間に」。
11 4 【犬もともについて行った】 ⓡ旧 による。 ⓢ は「犬もかれとトビアに従い、ふたりについて行った」。

11 11 【痛みを感じた】 ⓡ旧 による。
11 12 【白い膜】 ⓢB による。 ⓢ にはない。
11 14 【その偉大な……賛美されますように】 ⓡ旧 による。 ⓢ はこの箇所に重複誤写して「その偉大なみ名をわたしたちの上にもあらしめ、すべての天使はとこしえに賛美されますように」を加えている。
〃 【あわれみをたれてくださった】 ⓡ旧 ⓢB による。
11 15 【トビト】 ⓡ旧 による。 ⓢ は「トビア」。
11 19 【そのおい】 ⓢB による。 ⓢ は「その（トビトの）おいたち」。
〃 【ナダブ】 ⓡ旧写 による。 なお 14 10 参照。 ⓢ は「ナバド」。
11 20 【そして……与えられた】 ⓡ旧 による。 ⓢ にはない。
12 6 【神に感謝しなさい。その偉大さをあがめ】 ⓢB ⓡ旧 による。 ⓢ はこの句を書き落としている。
〃 【よいことです】 ⓢB による。 ⓢ にあるこれと同語の「アガタ」（恵み）は前文にかかる。
12 8 【断食】 ⓢB ⓡ旧 による。 ⓢ は「真理」。
12 12 【それを読みました】 ⓡ旧 による。 ⓢ にはない。
12 14 【あなた】 ⓡ旧 による。 ⓢ にはない。
12 15 【聖なる】 ⓢB ⓡ旧 による。 ⓢ にはない。
12 19 【わたしが食べるのを見た】 ⓡ旧 による。 ⓢ は「わたしが何も食べなかったのを見た」。
13 1 【トビトは喜びにあふれ、祈りを書きしるして】 ⓡ旧 ⓢB による。
13 2 【限りなく続く】 ⓡ旧 による。 ⓢ にはない。

〃　【ふち】 ⊛Sは「滅び」。このギリシア語は、ヘブライ語の「アバトン」（格15[11]、黙9[11]参照）の訳語と推定して、「ふち」と訳した。

13 5　【あなたがたをふたたび集められるであろう】 ⓐ旧による。⊛Sはこの部分を書き落としている。

13 8–11　【わたしは……打たれた】 ⓐ旧による。⊛Sにはない。

13 11　【正義の子らをふたたびあわれまれる】 ⊛Bによる。ⓐ旧にはない。

〃　【王】 ⊛Bによる。ⓐ旧は「主」。

13 13　【主なる神】 ⊛Bによる。⊛Sは「聖なるあなた」。

〃　【あなたの名】 ⓐ旧による。⊛Sは「選ばれた者の名」。

13 14　【建てる】 ⓐ旧による。⊛Sは「おそれる」。

13 15　【楽しみ】 ⓐ旧⊛Bによる。⊛Sは「行け」。

13 17　【新たに】 ⓐ旧による。⊛Sは「都に」。

〃　【オフル】 ヘブライ語へ復元。⊛Sは「スフィル」。

13 18　【あなたのもとで】 ⓐ旧による。⊛Sにはない。

14 2　【視力を失った】 ⊛Bによる。⊛Sは「目をわずらった」。

14 4　【アッシリア】 ⓐ旧による。⊛Sは「アテル」。

14 12　【子ら】 ⓐ旧⊛Bによる。⊛Sにはない。

ユディト書

1 16　【ニネベに】 ⊛A ⓐ旧写 による。Rにはない。

2 7　【わが軍隊】 女脈による。Rは「かれら」。

2 28　【ガザ】 ⊛Sによる。

3 8　【聖所】 ギリシア語の「ホリア」（国境）を「ヒエラ」（聖所）と推定して読んだ。4[1]参照。

3 9　【平野】 ヘブライ語に復元して子音をわずかに変えた読み方による。⊛は「山脈」。

4 9　【断食】 ⊛S ⓐ旧写 ⓢによる。Rは「熱心」。

6 1　【アンモンの子ら】 ⊛写 による。Rは「モアブの子ら」。

6 2　【アンモン】 ⊛写 ⓐ旧写 による。Rは「エフライム」。

6 6　【やり】 ⓐ旧ⓢによる。Rは「民」。

6 12　【町の人々】 ⓐ旧ⓢによる。Rは次行の「山の頂にいる町の人々」を誤記してここにも入れた。

7 17　【モアブ】 ⊛写 ⓐ旧写 ⓢによる。Rは「アンモン」。

7 18　【一万二千のアッシリア人とともに】 ⓐ旧ⓢによって加える。

7 27　【かわきで死ぬよりも】 ⊛写 によって加えた。

7 28　【あなたがたは（……）しなさい】 ⊛写 ⓐ旧写 による。なおⓢ参照。Rは第三人称で消極的形を用いて「（神または人）が（……）しないように」。なお注11参照。

8 1 【シメオンの子】 ㊥写 ㊦によって付け加えた。㊤旧写 ㊤と9 2 を参照。

8 10 【オジア】 ㊥写 ㊤旧写 によって付け加えた。なお28と35節参照。

9 2 【帯】 Rでは「メトラ」(胎) となっているが、本訳はそれを「ミトラ」(帯) と読んで訳した。

10 5 【チーズとパン】 ㊥写 ㊤旧 ㊦による。㊤参照。Rは「良いパン」。

〃 【物】 このギリシア語の「アンゲイア」はヘブライ語では「ケリ」。一般的には「器」を意味するが、またその内容をもさす。

14 7 【再び意識がもどると】 ㊥A ㊥写 ㊤旧 による。㊤参照。Rでは「かれらがかれを引き起こすと」。

15 4 【山々】 ㊤旧写 による。㊥は「すべての境」。

16 1 【ほめたたえよ】 ヘブライ語に復元して子音をわずかに変えた読み方による。㊥は「始めよ」。

〃 【新しい歌】 ㊥A ㊥写 ㊤旧写 ㊦による。なお㊤参照。Rは「歌と賛美」。

16 2 【を築き】 ㊤旧 ㊦による。なお㊤参照。Rによれば本句は「その民の中にある陣営にわたしを連れ行き」となっている。

16 11 【叫ぶ】 ㊥写 ㊤旧写 ㊦による。Rは「恐れた」。

エステル書

1 1a 【アハシュエロス】 ㊇1 1 その他による。㊥は「アルタクセルクセス」。また1 1n 3 13a 8 12b も同じ。

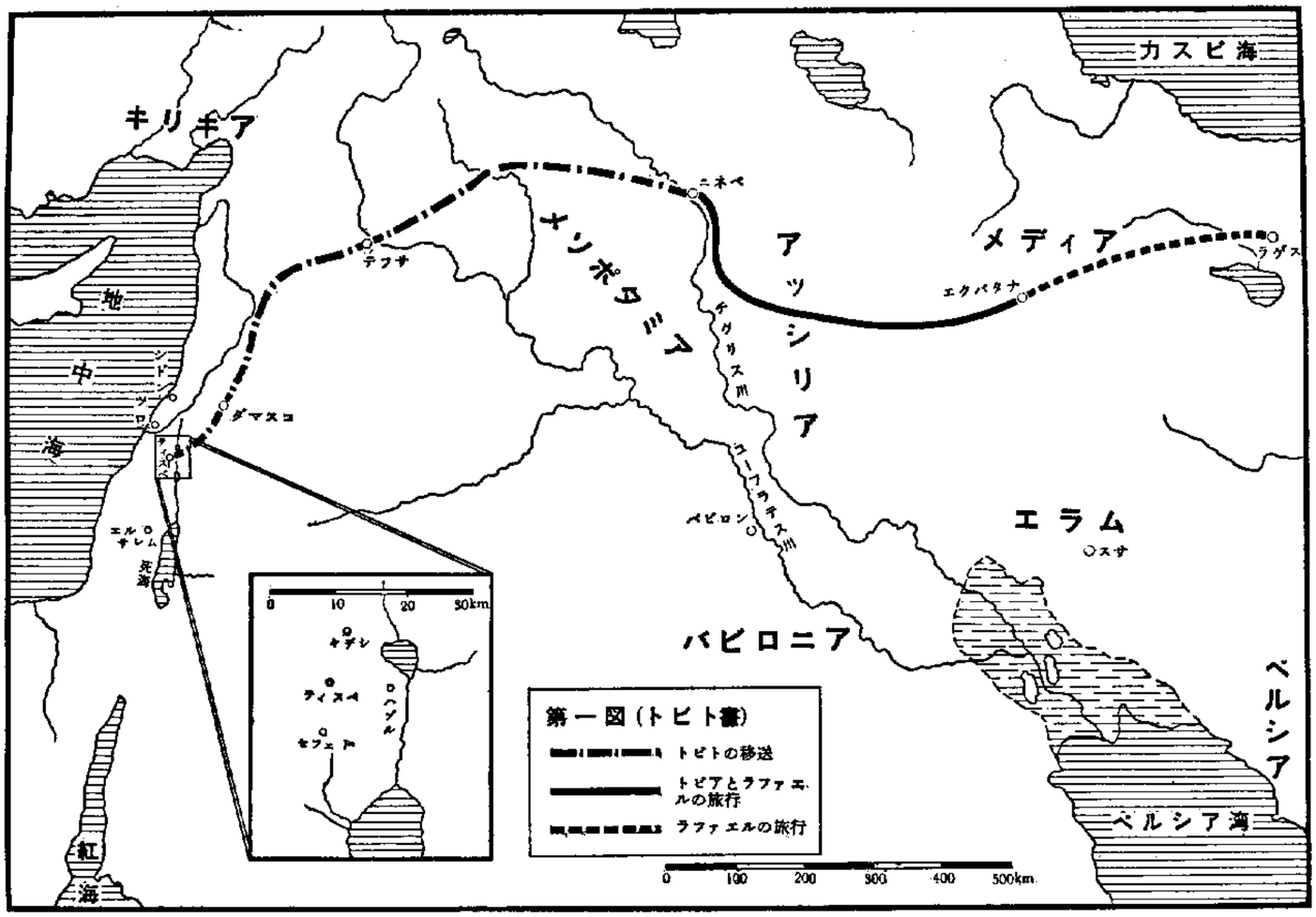
1 1m 【ビグタンとテレシ】 ㊇2 21 による。㊥は「ガバタとタッラ」。

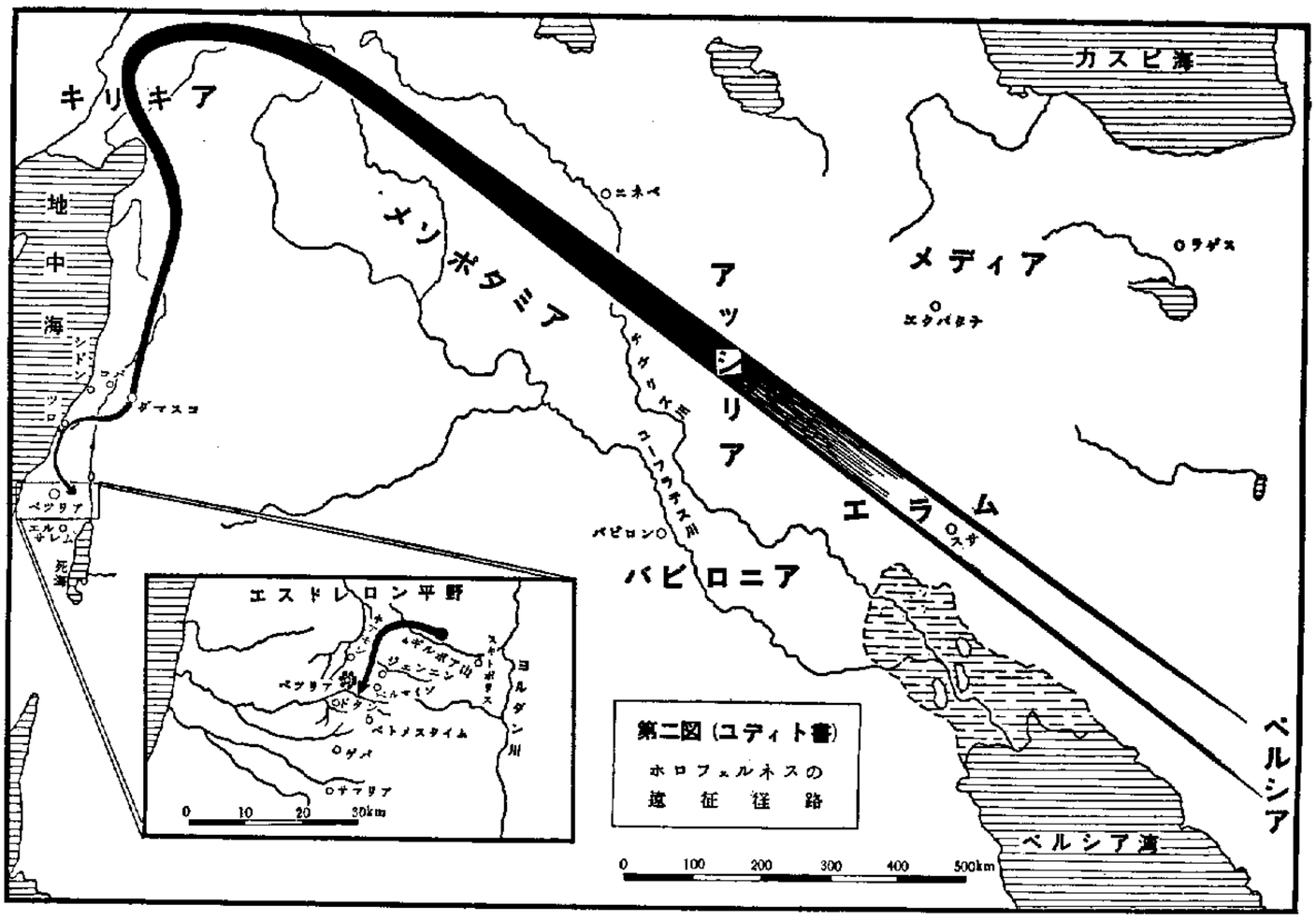
〃 【に住んでいた】 ㊤による。㊥は「寝ていた」。

1 1r 【アガグ人】 ㊇3 1 その他による。㊥㊤は「ブゲ人」。ルキアノス校訂本は「マケドニア人」。

2 19 【さまざまの】 ヘブライ語の母音を変えた読み方による。㊇は「再び」。

10 3l 【プリム】 ヘブライ語本の読み方による。㊥は「フルライ」。


カスピ海
キリキア
ニネベ
メソポタミア
アッシリア
メディア
ラゲス
テフサ
エクバタナ
地中海
シドン
ツロ
ダマスコ
ティグリス川
ユーフラテス川
エルサレム
死海
バビロン
エラム
スサ
バビロニア
ペルシア
ペルシア湾
紅海
0 10 20 30km
ナブレ
ティスベ
ケデシ
ロウブル
第一図（トビト書）
トビトの移送
トビアとラファエルの旅行
ラファエルの旅行
0 100 200 300 400 500km


カスピ海
キリキア
ニネベ
メソポタミア
アッシリア
メディア
ラゲス
エクバタナ
地中海
シドン
ツロ
ダマスコ
ベツリア
エルサレム
死海
ティグリス川
ユーフラテス川
バビロン
エラム
スサ
バビロニア
ペルシア
ペルシア湾
エスドレロン平野
ベツリア
ベトメスタイム
ダバ
ナブリア
ヨルダン川
0 10 20 30km
第二図（ユディト書）
ホロフェルネスの
遠征経路
0 100 200 300 400 500km

Imprimi potest. Romae, die 2 junii 1960
Fr. Aug. Sépinski, Min. Gen. O. F. M.
Imprimatur. Tokyo, die 21 junii 1960
+ Petrus Cardinalis Tatsuo Doi
Archiepiscopus Tokiensis

昭和三十五年九月十五日 初版発行
昭和五十七年十月十五日 第九刷発行
定価 上製一七〇〇円 並製一二〇〇円
訳注者 フランシスコ会聖書研究所
印刷所 聖パウロ会八王子修学院
発行所 東京都新宿区四谷一ノ二 サンパウロ社 160
電話〇三(三五七)六四〇一(代)
振替東京二一六二二三三番

版権所有

Studium Biblicum Franciscanum
4-16-1, Seta
Setagaya-ku, Tokyo
158 Japan

Publisher

Chuo Shuppansha
1-2, Yotsuya
Shinjuku-ku, Tokyo
160 Japan

ISBN4-8056-6304-9 C3016 (上製)
ISBN4-8056-6305-7 C3016 (並製)

既刊

創世記
出エジプト記
レビ記
トビト書、ユデイィト書、エステル書
マカバイ記 上・下
詩編
コヘレト（伝道の書）、雅歌
知恵の書
シラ書（集会の書）
ホセア書
マタイによる福音書
マルコによる福音書（改訂版）
ルカによる福音書
ヨハネによる福音書
使徒行録
パウロ書簡 I
（ローマ、ガラテヤ）
パウロ書簡 II
（I-IIコリント）
パウロ書簡 III
（エフェソ、フィリピ、コロサイ、I-IIテサロニケ、フィレモン）
パウロ書簡 IV
（I-IIテモテ、テトス）・ヘブライ書
全キリスト者への手紙
（ヤコブ、I-IIペトロ、I-II-IIIヨハネ、ユダ）
黙示録

次期出版予定

サムエル記 上・下